戸田市文化財調査報告　34

前谷遺跡XI

埋蔵文化財発掘調査報告書

２０２２

埼玉県戸田市教育委員会

は じ め に

埼玉県の南東部に位置する戸田市は、荒川の自然に恵まれ、古くから交通の要衝として発展してきました。現在は交通の利便性から都心部のベッドタウンとして市街地化が進み、人口 14 万人を超える都市に成長しています。

近年、まちの景観の変化とともに社会的、文化的な環境も変わってきておりますが、古来から受け継がれてきた伝統や歴史を守り、人々の絆を一層強いものとするために、文化財の保護が求められているところです。

今回報告いたします前谷遺跡第 11 次発掘調査は、個人住宅建設に伴い令和３年に緊急発掘調査が行われたものです。

この発掘調査により、弥生時代後期から中世に生活を営んだ人たちが遺した貴重な資料を多数検出し、当時の人々の生活や土地利用のあり方などを知る良好な資料を得ることができ、地域の遺跡の性格の一端を明らかにすることができました。本書が、戸田をより深く学習するための一助となることができましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、本事業の遂行にあたり、御尽力、御協力を賜りました関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

戸田市教育委員会

教育長　戸ヶ﨑　勤

例　　言

1．本書は、埼玉県戸田市上戸田二丁目25番1に所在する前谷遺跡第11次発掘調査の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、事業者による個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として、埼玉県戸田市教育委員会（以下、「市教委」という。）が実施した。また、出土品等整理及び報告書作成作業は、市教委が実施した。

3．発掘調査は、令和3年7月12日から令和3年8月25日まで行い、整理作業・報告書作成作業は令和3年9月1日から令和4年2月28日まで市教委生涯学習課埋蔵文化財等整理室及び戸田市立郷土博物館事務室にて実施した。

4．発掘調査及び整理作業、報告書作成に要した経費は、全て戸田市の負担による。

5．本書は市教委が刊行し、今井源吾が編集及び執筆を行った。

6．発掘現場での記録写真及び出土遺物の撮影は今井源吾が行った。

7．本書の版権は、市教委が保有する。発掘調査成果の周知、活用、学術研究、教育等を目的とする場合は、本書の一部を無償で複製し、利用できるものとする。

8．出土遺物及び発掘調査の各種データ等は全て市教委が保管し、活用を図るものとする。

9．本事業は以下の組織により実施した。

【埼玉県戸田市教育委員会】

教　　育　　長　戸ヶ﨑　勤
教　育　部　長　山上　睦只
次　　長　星野　正義
生涯学習課長　鎌田　陽子
　　高屋　勝利
生涯学習課主幹　本橋　洋
生涯学習課主事　金子　遥奈
　　今井　源吾（出土品整理・報告書作成担当）

発掘調査及び整理作業参加者

榎本　昇　榎本　眞由美　大熊　福太郎　椛木　美奈子　川合　アケミ　平吹　通之
中信　節子　山岸　榮

10．調査及び本書を作成するにあたり、次の方に御指導、御協力を賜った。記して謝意を表すものである。

若松　良一

（敬称略　五十音順）

凡　　例

1．　挿図中の地図、検出遺構実測図等の方位は、図中に真北の方位を示した。

2．　本書の国家座標、緯度、経度は世界測地系に則している。

3．　遺構番号は調査の進捗過程で、そのプランの確認された順に遺構の種別ごとに付したが、整理・報告書作成作業の過程で遺構番号を振り直している。なお、遺構略号は下記のとおりである。

SX：周溝状遺構　SD：溝状遺構　SK：土坑　P：ピット

4．　発掘調査時の土層観察における色調及び遺物観察における色調は、『新版　標準土色帖』2013 年度版（小山正忠・竹原秀雄　編・著、農林水産省農林水産技術会議事務所監修、財団法人日本色彩研究所　色票監修、日本色研事業株式会社　発行）を参考にした。

5．　遺構断面図内の土層説明は、全て記録者の記載に従う。

6．　遺物拓影図は、向かって左側に内面を、右側に外面を示した。ただし外面のみの場合には、向かって左側に外面を示した。

7．　遺物の種別のうち、弥生時代後期後半から古墳時代前期に属する土器は、すべて「土師器」と表記した。

8．　遺物実測図のうち、土師器の断面は白抜きにした。また、拓影がない赤彩部はトーンで図示した。

9．　遺物観察表法量の［　］の値は残存部からの推定値を示す。

１０．遺物実測図及び遺構実測図、写真図版の縮尺はすべて挿図中に示した。

１１．標高は、T．P（東京湾中等潮位）を基準とした。

１２．遺構実測図の水糸レベルはすべて標高 3.20m に統一した。

１３．土層断面図の層位番号は、基本土層と共通するものはローマ数字、個別の遺構覆土の層位はアラビア数字で示した。

１４．遺物実測図及び遺物写真図版の個別番号のうち、「①」のように示した遺物は遺構平面図中に出土地点を示した資料であり、遺構平面図中の「①」に対応している。一方、「１」のように示したものは一括取り上げ資料であり、遺構平面図に出土地点を示していない資料である。

１５．出土遺物の註記は、下記の原則に基づき行った。

例：MY．　11．　SX　—　1．　1

遺跡略号　調査次　遺構種別　遺構番号　遺物番号

表面採取遺物や撹乱層出土遺物については、遺跡略号及び調査次のみを記載した。

なお、写真図版中の遺物写真には、旧遺構番号のまま註記を修正していないものがある。

目　　次

はじめに
例言／凡例
目次／挿図目次／挿表目次／図版目次
第１章　調査に至る経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯・・・１
　第２節　発掘調査と整理作業の経過
　　１　発掘調査・・・１
　　２　整理作業・・・２
第２章　周辺環境と遺跡・調査の概要
　第１節　地理的環境・・３
　第２節　歴史的環境・・４
　第３節　遺跡・調査の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・６
　第４節　基本土層・・１２
第３章　検出された遺構と遺物
　第１節　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物
　　１　周溝状遺構・・１３
　　２　溝状遺構・・・１９
　　３　土坑・・・２５
　第２節　平安時代から中世の遺構と遺物
　　１　溝状遺構・・・２７
　第３節　その他の遺構と遺物
　　１　ピット・・２９
　　２　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３０
第４章　まとめ
　　１　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３３
　　２　平安時代から中世までの遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３４
　　３　まとめ・・・３４
参考文献
前谷遺跡試掘調査出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３５
写真図版
報告書抄録 / 奥付

挿図目次

第１図　埼玉県の地形・・・・・・・・・・３
第２図　戸田市域の地形・・・・・・・・・４
第３図　前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図・５
第４図　前谷遺跡調査区位置図・・・・・８
第５図　調査区全体図・・・・・・・・・・９
第６図　調査区等高線図・・・・・・・・１０
第７図　基本土層図・・・・・・・・・・１２
第８図　第１号周溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SX01）（１）・・・・・１４
第９図　第１号周溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SX01）（２）・・・・・１５
第 10 図　第１号周溝状遺構出土遺物実測図（SX01）（１）・・・・・・・・・・１６
第 11 図　第１号周溝状遺構出土遺物実測図（SX01）（２）・・・・・・・・・・１７
第 12 図　第２号周溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SX02）・・・・・・・・１８
第 13 図　第２号周溝状遺構出土遺物実測図（SX02）・・・・・・・・・・・・１８
第 14 図　第１号溝状遺構実測図（SD01）・・・・・・・・・・・・・・・・１９
第 15 図　第１号溝状遺構出土遺物実測図（SD01）・・・・・・・・・・・・２０
第 16 図　第２号溝状遺構実測図（SD02）・・・・・・・・・・・・・・・・２０
第 17 図　第４号溝状遺構実測図（SD04）・・・・・・・・・・・・・・・・２１
第 18 図　第５号溝状遺構実測図（SD05）・・・・・・・・・・・・・・・・２２
第 19 図　第６号溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SD06）・・・・・・・２３
第 20 図　第６号溝状遺構出土遺物実測図（SD06）・・・・・・・・・・・２４
第 21 図　第７号溝状遺構実測図（SD07）・・・・・・・・・・・２４
第 22 図　第１・２・３・４号土坑実測図（SK01・02・03・04）・・・２６
第 23 図　第１・３号土坑出土遺物実測図（SK01・03）・・・・・・・・・２７
第 24 図　第３号溝状遺構実測図（SD03）・・・・・・・・・・・・・・・・２８
第 25 図　第３号溝状遺構出土遺物実測図（SD03）・・・・・・・・・・・２９
第 26 図　第１～９号ピット実測図（P01～P09）（１）・・・・・・・・２９
第 27 図　第１～９号ピット実測図（P01～P09）（２）・・・・・・・・３０
第 28 図　遺構外出土遺物実測図・・・３１
第 29 図　上戸田 2-25-2 他出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・３５
第 30 図　上戸田 2-27-8 出土遺物実測図・・・・・・・・・・・・・・・・３６
第 31 図　上戸田 2-25-2 他、上戸田 2-27-8 平面実測図・・・・・・・・・３６

挿表目次

第１表　前谷遺跡周辺遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・５
第２表　第１号周溝状遺構出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・１７
第３表　第２号周溝状遺構出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・１８
第４表　第１号溝状遺構出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・２０
第５表　第６号溝状遺構出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・２４
第６表　第１・３号土坑出土遺物観察表・・・・・・・・・・・・・・・・２７
第７表　第３号溝状遺構出土遺物観察表

・・・・・・・・・・・・・・・２９
第８表　ピット計測表
・・・・・・・・・・・・・・・３０
第９表　遺構外出土遺物観察表
・・・・・・・・・　・・・・・３２
第１０表　遺物出土点数・重量一覧
・・・・・・・・・・・・・・・３２
第１１表　上戸田 2-25-2 他、上戸田 2-27-8
試掘調査出土遺物観察表・・・３６

図版目次

図版１
1　西側調査区　完堀（東から）
2　東側調査区　完堀（西から）

図版２
1　東側調査区　完堀（北西から）
2　第１号周溝状遺構断面 A-A'（南から）
3　第１号周溝状遺構断面 B-B'（東から）
4　第１号周溝状遺構断面 D-D'（西から）
5　第１号周溝状遺構北構完堀（北東から）
6　第１号周溝状遺構南溝完堀（西から）
7　第１号周溝状遺構南溝完堀（西から）
8　第１号周溝状遺構　遺物出土状況（１）（南から）

図版３
1　第１号周溝状遺構　遺物出土状況（２）（東から）
2　第２号周溝状遺構壁断面 A-A'（北から）
3　第１・２号周溝状遺構完堀（東から）
4　第１号溝状遺構断面 A-A'（北東から）
5　第１号溝状遺構・第２号土坑断面（北東から）
6　第１号溝状遺構・第２号土坑完堀（北東から）
7　第２号溝状遺構完堀（南西から）
8　第３号溝状遺構断面 B-B'（西から）

図版４
1　第３号溝状遺構完堀（１）（東から）
2　第３号溝状遺構完堀（２）（東から）
3　第４号溝状遺構断面 B-B'（北から）
4　第４号溝状遺構完堀（南東から）
5　第５号溝状遺構断面 B-B'（西から）
6　第５号溝状遺構完堀（南東から）
7　第６号溝状遺構断面 A-A'（西から）
8　第１号周溝状・第６号溝状遺構東壁断面（北西から）

図版５
1　第６号溝状遺構完堀（北東から）
2　第７号溝状遺構完堀（北から）
3　第１号土坑断面 A-A'（北から）
4　第１号土坑完堀（北から）
5　第３号土坑完堀（南から）
6　第４号土坑完堀（北西から）
7　遺構外土師器壺出土状況（南から）
8　基本土層（南から）

図版６
出土遺物①

図版７
出土遺物②

図版８
出土遺物③

図版９
出土遺物④

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

令和２年２月、事業者から戸田市教育委員会（以下、「市教委」という。）に対し、戸田市上戸田二丁目25番１における207.49㎡の個人住宅建設事業計画及び埋蔵文化財の取り扱いについて相談があった。

当該事業計画地は前谷遺跡の包蔵地内であったため、令和３年６月21日に市教委による試掘確認調査を実施した。試掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期に帰属する溝状遺構等が確認され、同時期に帰属するものと考えられる土器を検出した。

今回の事業計画地について試掘調査の結果に基づき市教委と事業者間で埋蔵文化財の保存について協議をもち、基礎工事等で埋蔵文化財の破壊が避けられない部分（207.49㎡）については記録保存のための緊急発掘調査を行い、残りの部分（612.15㎡）は、遺構確認面から30㎝以上の保護層を確保することにより埋蔵文化財の現状保存を実施することで合意した。

令和３年４月27日、事業者から文化財保護法第93条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出され、市教委は令和３年７月２日付戸教生第448号にて埼玉県教育委員会（以下、「県教育委員会」という。）に宛て進達した。

これを受け、県教育委員会から事業者に対し、令和３年７月５日付け教生文第5-915号で、事業計画地内における工事着手前に発掘調査を実施するよう指示があった。

発掘調査に当たり、事業者は、市教委に対し、令和２年10月26日付けで発掘調査の依頼書を提出していた。また、令和３年７月７日付け戸教生第630号にて事業者及び市教委の二者による「個人住宅建設予定地に係る埋蔵文化財の取扱いに関する協定書」を締結した。

そして、文化財保護法第99条に基づき、市教委から県教育委員会宛てに令和３年７月８日付け戸教生第627号にて埋蔵文化財発掘調査の通知を提出し、前谷遺跡第11次発掘調査を実施することとなった。

第２節　発掘調査と整理作業の経過

１　発掘調査

前谷遺跡第11次調査は、令和３年７月12日から８月25日まで実施した。調査面積は、207.49㎡である。７月12日に機材搬入、発掘現場の仮囲い等を行った。調査区は、西側と東側に分割し、掘削で生じた排土は調査区の未掘削範囲に仮置きして、ブルーシートをかけて保管した。同日重機による調査区西側部分の表土剥ぎを実施した。13日に発掘調査補助員を動員し、人力による遺構確認を行い、遺構検出状況の図面作成と写真撮影を行った。発掘調査での写真撮影は、全てデジタル一眼レフカメラNikon D5100を使用し、JPEG形式にて撮影した。また、委託業者によ

る調査区の測量、基準杭打設を令和３年７月14日に行った。13日から検出された遺構の番号付与及び土層観察用ベルトを設定し、遺構掘削を開始した。７月13日から８月２日まで遺構掘削と遺構平面図、土層断面図作成、出土遺物の取り上げを行った。平面図及び出土遺物の取り上げは、全て簡易遣り方測量で実施した。西側調査区の調査は、８月２日までに終了し、８月３日に重機による埋め戻し及び整地を実施した。

東側調査区は、８月３日に調査区を設定し、翌４日に重機による表土剥ぎを実施した。８月５日に遺構検出を行い、遺構検出状況の図面作成と写真撮影を行った。８月５日から検出された遺構の番号付与及び土層観察用ベルトを設定し、遺構掘削を開始した。８月５日から８月24日まで遺構掘削を行い、遺構平面図、土層断面図作成、出土遺物の取り上げを行った。東側調査区の調査は、８月24日までに終了し、８月25日に重機により東側調査区の埋め戻し・整地を行い、機材を撤収し、全ての現場作業が完了した。

２　整理作業

当該調査に係る出土品及び図面の整理作業、報告書作成は令和３年９月１日から令和４年２月28日まで生涯学習課埋蔵文化財等整理室及び戸田市立郷土博物館博物館事務室にて実施した。

発掘現場で採取した出土品は、洗浄・註記・接合を行った。その後、報告書に掲載するもの抽出・実測図作成・拓影採取を行った。採取した拓影はスキャナにてコンピュータに取り込んだ後、Adobe Photoshopにて修正し、デジタルデータ化した。遺物実測図、発掘現場で遺構平面図、土層断面図等の図面類も、スキャナでコンピュータに取り込み、デジタルデータ化した。これらの各種図面データは、Adobe Illustratorにてデジタルトレースを行った。

遺物写真は、CanonEOS80D、18 ～ 50ｍｍズームレンズを使用してRAW（NEF）形式で撮影し、Digital Photo Professionalにより現像処理、ホワイトバランス等の補正を行い、jpeg形式ファイルを作成した。版下は、Adobe Illustrator、Adobe InDesignにて作成し、PDF形式ファイルにて入稿した。

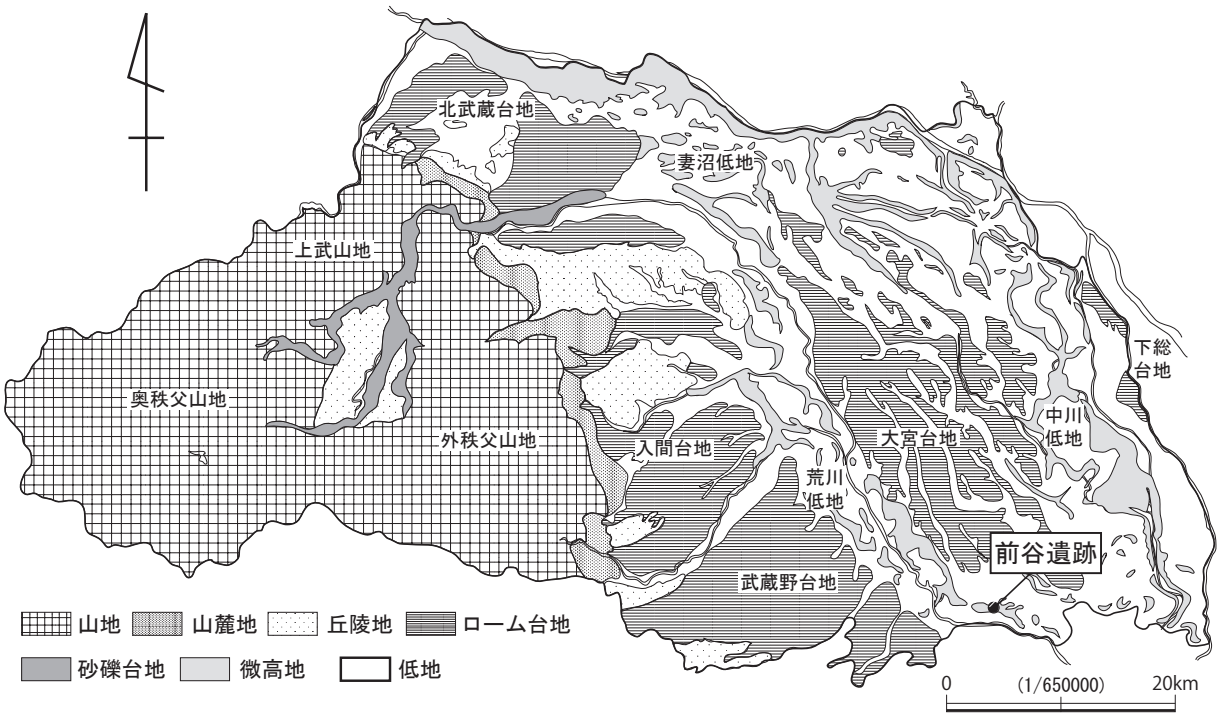
第２章　周辺環境と遺跡・調査の概要

第１節　地理的環境

戸田市は、埼玉県最南端部に位置し、東西約 6.0km、南北約 3.0km、面積 18.19 ㎢の東西に細長い形状を呈する。北はさいたま市、東は蕨市及び川口市にそれぞれ地続きで接し、西の朝霞市及び和光市、南の東京都板橋区及び北区とは、荒川を隔てて接している。市域には、国道 17 号線（旧中山道）や新大宮バイパスが南北に走り、首都高速５号線、東京外郭環状道路、JR 埼京線の開通により交通の利便性が高まり、急激な市街地化が進んでいる。都心に近い立地のため、工場や流通センターが数多く所在する。

戸田市の地形は、約２万年前の最終氷期に形成された開析谷を、利根川等の河川が運搬した土砂で充填してできた平坦な沖積低地 (荒川低地) に位置している。荒川低地の下流には標高３ｍほどの微高地が発達し、市内では中央部を西は美女木から上戸田を通り、東は川口市まで荒川にそって分布し、この微高地の南北に低地が裾のように広がる。この微高地は自然堤防とする説もあるが、荒川右岸に微高地が確認できないことや、形状が団子状を呈していることから浅谷もしくは海成段丘との指摘もある。

市内の地層は、戸田市本町付近では地下 50 ｍの地点に開析谷の基底礫層があり、その上に軟弱な沖積層が充填している。沖積層の上部２ｍから３ｍの層は戸田・蕨地域ではよく見ることができる黄褐色・灰白色のシルト質粘土層で、戸田市においては遺跡の検出面としている層である。この層は岩質が均一である点や、微低地にはヨシ・マコモなどの水辺植物の遺体からな

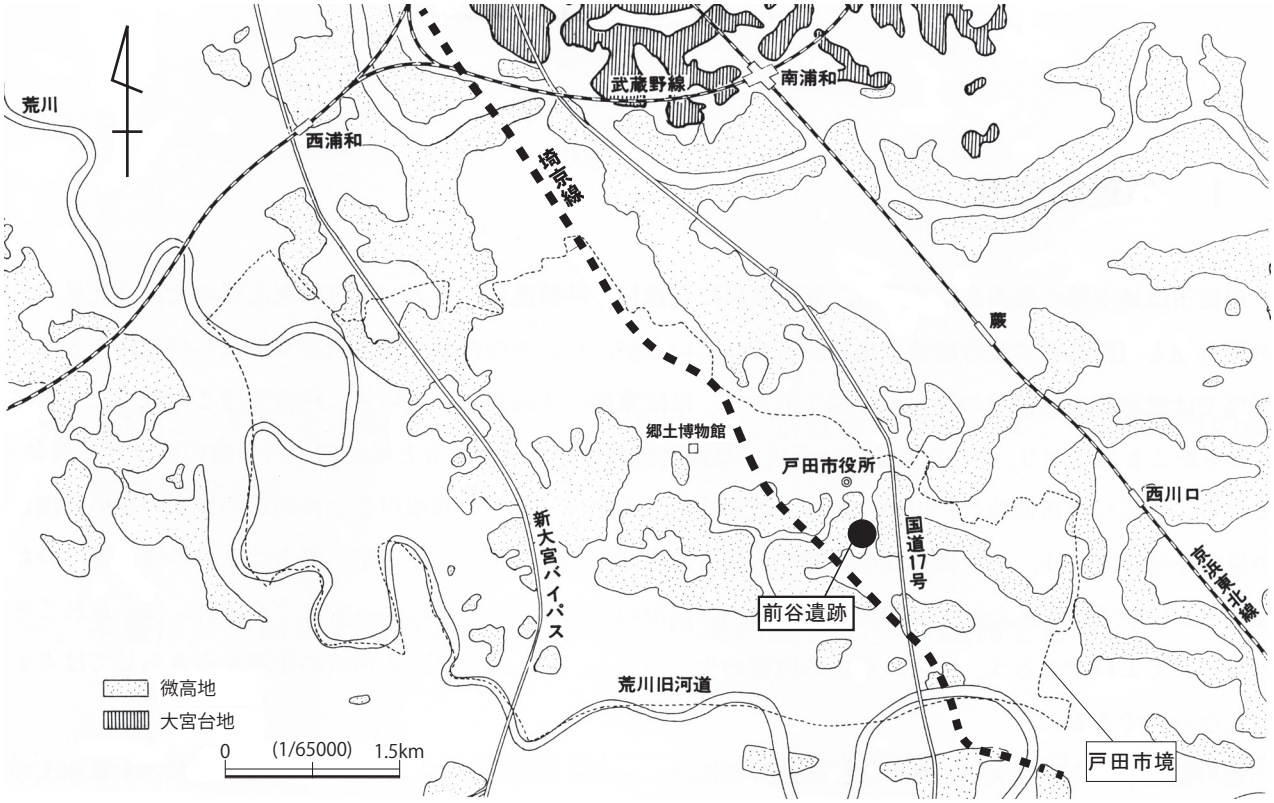


第１図　埼玉県の地形

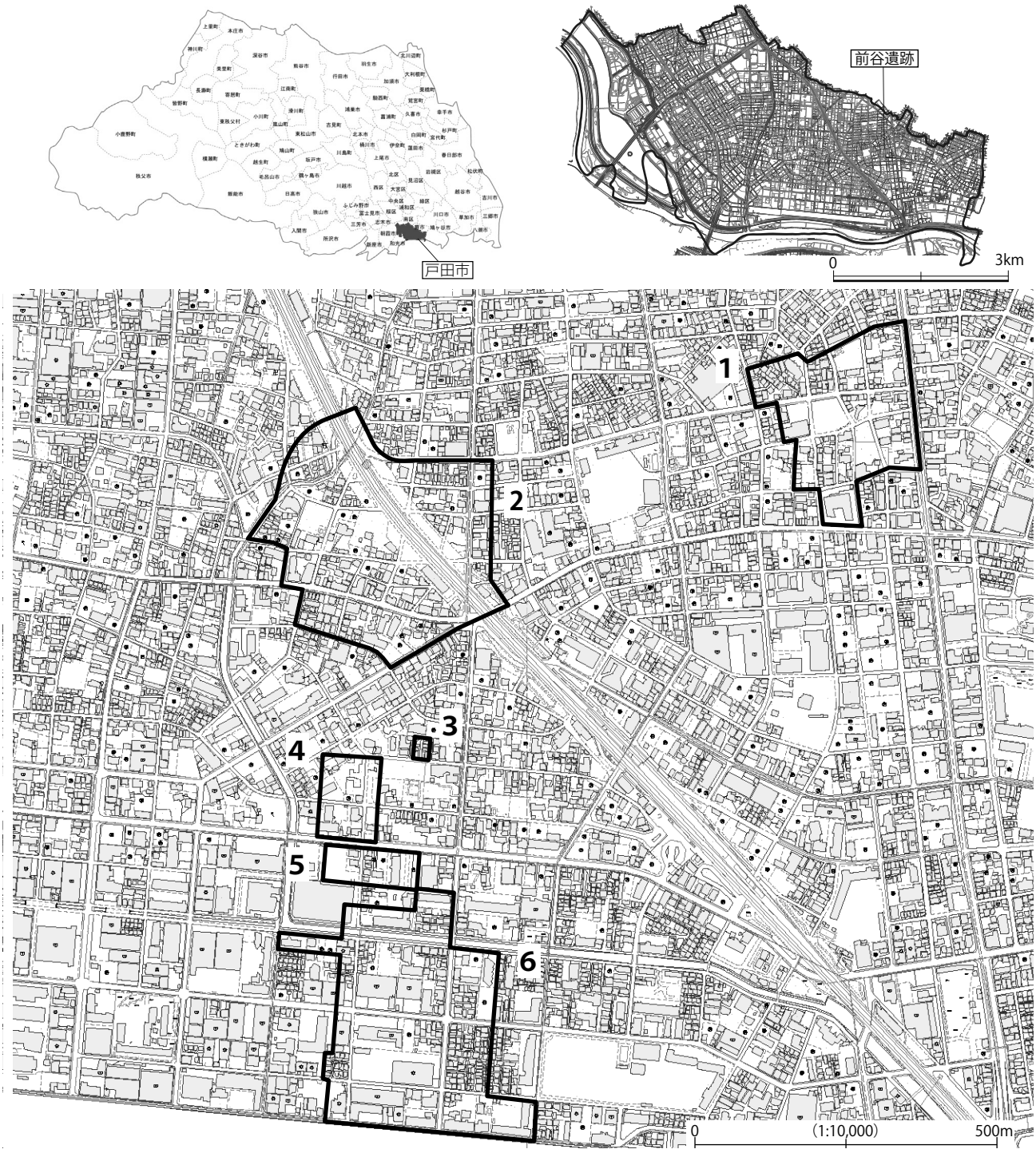
る泥炭層が挟在していることから、荒川低地を流れていた旧利根川が中川低地に東遷し、デルタ的環境から流水の影響の少ない湖沼・潟的な環境に移行した後に形成された層である。形成時期については、泥炭層の炭素年代が 1640 ± 60yBP とされることから、弥生時代末から古墳時代前期の時期にあたり、市内に初めて集落が形成された当時は微高地の周囲には湖沼・潟的な環境が広がっていたとみられる。

第 2 節　歴史的環境

戸田市では、現在までのところ旧石器時代の遺構・遺物は確認されていない。縄文時代に帰属する遺跡も確認されていないが、縄文時代前期後葉から後期中葉までの土器片が検出されている。前期では、堤外から前期後葉諸磯 a 式の破片資料 1 点が出土しており、本町からは前期末のほぼ完形の十三菩提式深鉢形土器が出土している。また、戸田市文化会館の建設中に、含礫砂層から縄文時代前期から中期の頃の化石人骨が見つかっている。人骨の周囲には丸木舟とみられる木屑なども見つかっており、この時期の戸田市域が海進の影響を受けていたことが分かる。中期は、鍛冶谷・新田口遺跡・前谷遺跡や南原遺跡などで勝坂式･阿玉台式や加曽利 E 式期の土器片が検出されている。後期は、鍛冶谷･新田口遺跡では、堀之内式、加曽利 B 式の土器片が出土しており、堤外からも同型式期に帰属する土器片が出土している。



第 2 図　戸田市域の地形



第３図　前谷遺跡及び周辺の遺跡位置図

第１表　　前谷遺跡周辺遺跡の概要

NO.	遺跡名	所在地	種別	主な時代	立地
1	前谷遺跡	戸田市上戸田２丁目	集落跡・城館跡	弥生後期・古墳前期・平安・鎌倉・南北朝・室町	微高地
2	鍛冶谷・新田口遺跡	戸田市上戸田３・５丁目、本町３丁目、大字新曽	集落跡	弥生後期・古墳前期	微高地
3	大前遺跡	戸田市本町３丁目	集落跡	古墳前期・平安・南北朝・室町	微高地
4	上戸田本村遺跡	戸田市本町３丁目	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前期/後期・中世	微高地
5	南町遺跡	戸田市南町	集落跡	古墳前期	微高地
6	南原遺跡	戸田市南町	集落跡・円墳	弥生後期・古墳前期/後期・奈良・平安・鎌倉	微高地

縄文時代晩期から弥生時代中期にかけての遺構・遺物は確認されていないが、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭になると、市域内の微高地上に遺跡が形成されるようになる。

弥生時代後期末から古墳時代前期では、前谷遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、南町遺跡、南原遺跡、上戸田本村遺跡及び根木橋遺跡で遺構・遺物が検出されている。この中でも昭和 51 年 (1976) に埼玉県選定重要遺跡に選定された鍛冶谷･新田口遺跡は、当該期の方形周溝墓（周溝状遺構）群や集落跡、木器の出土などから全国的に有名である。上戸田本村遺跡では、第 2 次及び第 3 次調査では、環濠と思われる溝状遺構と溝の東部に密集する竪穴建物群を検出していることから、上戸田本村遺跡周辺が当該期の環濠集落であった可能性が高い。中期の遺構・遺物が検出された遺跡は南原遺跡第 2 次調査 B 区で竪穴建物跡 3 軒、第 9 次調査で井戸跡 1 基、第 10 次調査で竪穴建物跡 1 軒と、土坑 2 基が確認されたのみである。

古墳時代後期は、上戸田本村遺跡や南原遺跡周辺で群集墳が形成される時期である。上戸田本村遺跡内には、「くまん塚」と呼ばれた円墳が所在し、そこから横穴式石室の石材の一部と直刀 2 振が出土している。また、上戸田本村遺跡では鬼高期の竪穴建物跡 2 軒、馬形埴輪や人物埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が 1 基検出されている。南原遺跡では、第 1 次調査で人物埴輪、円筒埴輪等が出土した円墳 1 基、第 2 次調査 A 区で円形周溝墓（円墳） 1 基、第 3 次調査 D 区で鬼高式期の竪穴建物跡 1 軒と屋外竈 1 基、第 4 次調査で円形周溝墓（円墳） 2 基、 6 次調査で円形周溝墓（円墳） 1 基、第 8 ・ 9 次調査で馬形埴輪、人物埴輪、家形埴輪、円筒埴輪等が出土した古墳周溝が 2 基検出されている。第 12 次調査では、人物埴輪、鶏形埴輪、円筒埴輪が出土した古墳周溝が 1 基検出されている。

平安時代は、南原遺跡、鍛冶谷・新田口遺跡、前谷遺跡で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑群、柵列跡、畝状遺構が検出されている。

中世は、市の西部からさいたま市の南西部がかつて佐々目郷に当たり、鎌倉時代から戦国時代にかけて鶴岡八幡宮の社領であった。当該期は、大前遺跡や上戸田本村遺跡、前谷遺跡、南原遺跡、南町遺跡及び美女木八幡社脇遺跡で掘立柱建物跡、溝状遺構、井戸跡などが検出されている。

近世は、市の大半の村が幕府の直轄領となり、徳川家の鷹場として使用されていたことがわかっている。また、五街道の一つである中山道の整備に伴い、荒川を渡る「戸田の渡し」が板橋宿と蕨宿を結ぶ交通の要所として機能していた。当該期は鍛冶谷･新田口遺跡第 9 次調査で溝状遺構や井戸跡が、美女木八幡社脇遺跡では美女木八幡社を廻っていた堀の跡が検出されている。

第 3 節　遺跡・調査の概要

前谷遺跡は、JR 埼京線戸田駅から南東に約 600m の埼玉県戸田市上戸田二丁目地内に所在する。遺跡周辺には、「檮構」、「竹ノ内」、「左衛門屋敷」、「雑色」、「元蕨」等の地名が古くから残っている。中山道蕨宿の成立が元蕨からの移住に伴うことが、戸田・蕨の近世文書で確認できることから、中世には同地に六斎市などが開かれていたとみられ、また土塁の一部であった可能性のある地膨れ状の地形が残存していたことから、「蕨城」がこの地域に存在していた可能性が指摘されている。

本遺跡は、昭和 47 年の第 1 次発掘調査から、本調査を含めて 11 次にわたる発掘調査が実施されている。

第 1 次発掘調査は、昭和 47 年 (1972) 8 月 23 日から 9 月 6 日までの期間で、店舗建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 2 基と平安時代から中世の溝状遺構 8 条などである。遺物は、周溝状遺構から複合口縁を持つ壺形土器、台付甕形土器、広口壺形土器、高坏形土器などが出土している。第 3 溝から 10 世紀代に比定できる灰釉陶器、須恵器、土師器等が検出され、第 4 溝は、断面形状が薬研状を呈しており、中世城館の堀であった可能性が指摘されている。

第 2 次発掘調査は、平成 19 年（2007） 2 月 13 日から 3 月 20 日までの期間で、共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として戸田市遺跡調査会が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 2 基、平安時代の掘立柱建物跡 1 棟、溝状遺構 3 条、中世の溝状遺構 2 条、井戸跡 2 基、土坑 1 基、その他時期不明であるが平安時代から中世に帰属する可能性がある柵列跡 4 列、土坑 4 基、ピット 43 基である。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の瓦塔片、土師器、須恵器、中世の陶器、漆器、板碑、その他土製紡錘車、砥石等である。これらのなかでも詳細な時期・産地は不明であるが、第 5 号溝状遺構から出土した線刻画が施された須恵器瓶の破片資料は、他に類例が少なく、特筆できる。

第 3 次発掘調査は、平成 23 年（2011）12 月 1 日から平成 24 年（2012） 1 月 31 日までの期間で、戸建分譲住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は古墳時代前期の周溝状遺構 6 基、井戸跡 1 基、土坑 10 基、平安時代の土坑 37 基、井戸跡 3 基、溝状遺構 1 条、ピット 59 基、中・近世の溝状遺構 4 基、井戸跡 1 基などである。遺物は、複合口縁を持つ壺形土器、甕形土器、台付甕形土器、無頸壺、 8 ・ 9 世紀の東金子、南比企及び末野産の須恵器、中世の常滑焼、近世の天目茶碗等が出土している。

第 4 次発掘調査は、平成 23 年 12 月 26 日から平成 24 年 1 月 1 8 日までの期間で戸建専用住宅建設に伴う緊急発掘調査として、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 1 基、溝状遺構 1 条、平安時代の溝状遺構 3 条を検出した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土器、平安時代の土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦塔片、中世の陶器等を検出した。

第 5 次発掘調査は、平成 28 年（2016） 6 月 1 日から 6 月 30 日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 4 基、溝状遺構 1 条、平安時代の溝状遺構 1 条、土坑 2 基、井戸跡 2 基、その他時期不明のピット 11 基を検出した。遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、平安時代の須恵器、ロクロ土師器、中世の陶器片を検出した。

第 6 次発掘調査は、平成 29 年（2017） 4 月 17 日から 5 月 31 日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の周溝状遺構 4 基、土坑 1 基、平安時代から中世相当の溝状遺構 5 条、土坑 21 基、井戸跡 4 基を検出

Ⅰ　第１次調査 (1972)　　: 戸田市教育委員会調査（伊藤 1978)

Ⅱ　第２次調査 (2007)　　: 戸田市教育委員会調査（岩井 2014)

Ⅲ　第３次調査 (2011)　　: 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（赤熊 2015）

Ⅳ　第４次調査 (2011 ～ 2012)：財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査（岩井 2015）

Ⅴ　第５次調査 (2016)　　: 戸田市教育委員会調査（長澤 2018)

Ⅵ　第６次調査 (2017)　　: 戸田市教育委員会調査（吉田 2019)

Ⅶ　第７次調査 (2019)　　: 戸田市教育委員会調査（今井・辻2020)

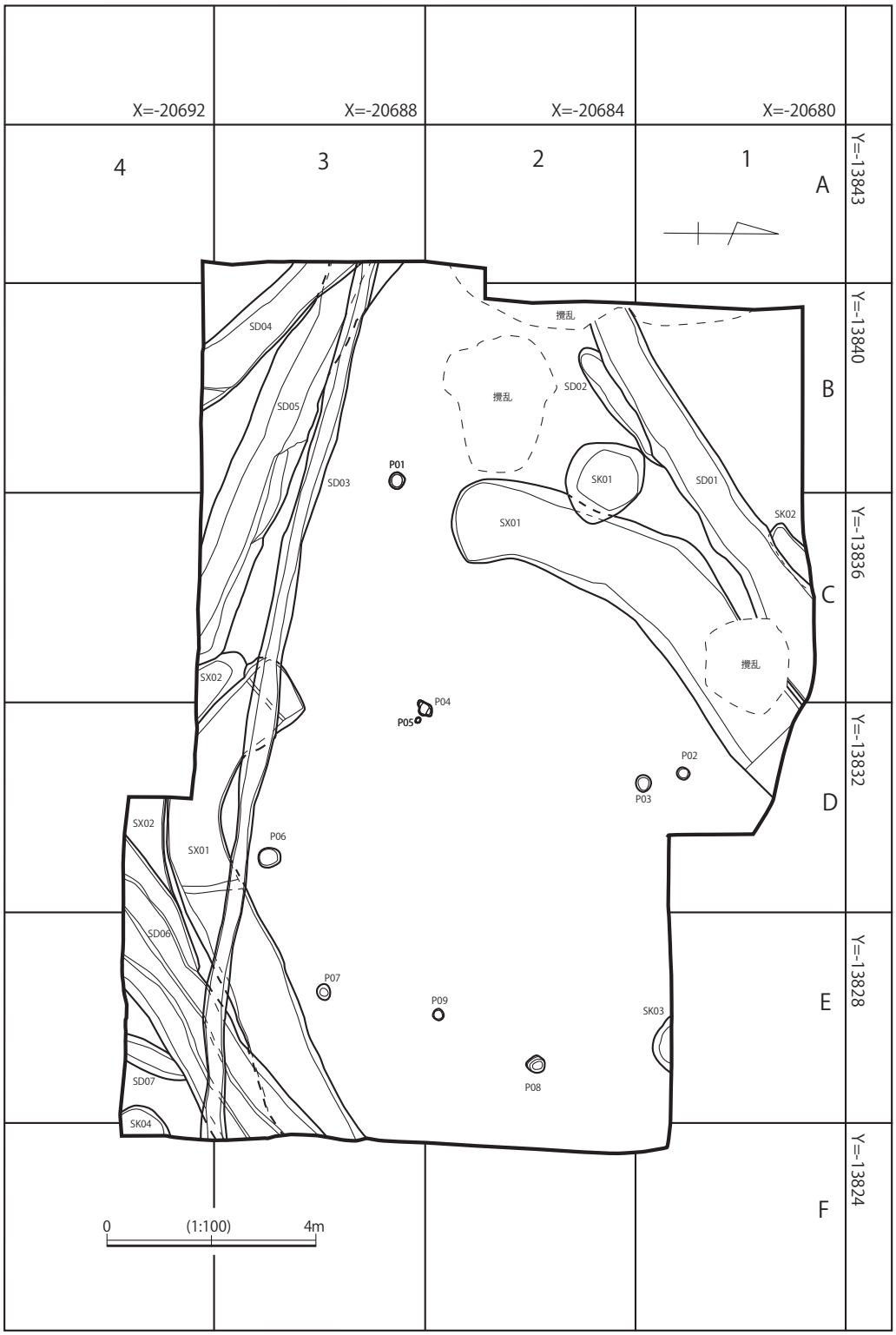
Ⅷ　第８次調査 (2020)　　: 戸田市教育委員会調査（今井・諸星2020)

Ⅸ　第９次調査 (2021)　　: 戸田市教育委員会調査（今井・内田2021)

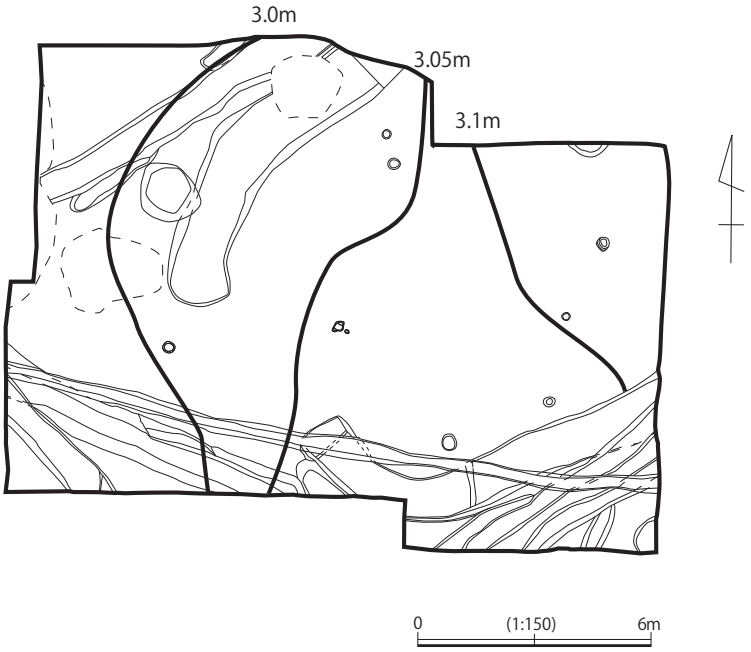
Ⅹ　第10次調査 (2021)　　: 戸田市教育委員会調査（今井・黒済・林2021)

Ⅺ　第11次調査 (2021)　　: 戸田市教育委員会調査（本調査)

第４図　前谷遺跡調査区位置図


X=-20692
X=-20688
X=-20684
X=-20680
4
3
2
1
A
B
C
D
E
F
Y=-13843
Y=-13840
Y=-13836
Y=-13832
Y=-13828
Y=-13824
SD04
SD05
SD03
SD02
SD01
SD06
SD07
SX01
SX02
SK01
SK02
SK03
SK04
P01
P02
P03
P04
P05
P06
P07
P08
P09
攪乱
攪乱
攪乱
0
(1:100)
4m

第５図　調査区全体図



第６図　調査区等高線図

した。出土遺物は、弥生時代後期後半から古墳時代前期初頭の土師器、平安時代の須恵器、ロクロ土師器、中近世の陶器片が出土した。

第７次発掘調査は、令和元年（2019）12 月２日から 12 月 20 日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、平安時代から中世までの畝状遺構 17 条、区画溝３条、土坑 26 基、その他時期不明のピット 23 基を検出した。出土遺物は、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、ロクロ土師器が出土した。このうち畝状遺構は平安時代の畑作遺構として戸田市内では初めて確認された。

第８次発掘調査は、令和２年（2020）５月８日から６月 12 日までの期間で共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、平安時代の柵列跡１基、溝状遺構１条、井戸跡１基、土坑２基、ピット４基、中世の溝１条、土坑４基、近世の土坑６基、ピット 12 基、時期不明の性格不明遺構１条、ピット 42 基を検出した。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、ロクロ土師器、陶器、砥石が出土した。

第９次発掘調査は、令和３年（2021）１月 13 日から２月 12 日までの期間で共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、弥生時代の周溝状遺構１基、ピット１基、奈良・平安時代の溝状遺構３条、時期不明の溝状遺構６条、土坑５基、ピット４基を検出した。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、土師質土器、陶器が出土した。周溝状遺構は、残存状況のいい壺、高坏等が多く出土しており、方形周溝墓の可能性が高い。

第 10 次発掘調査は、令和 3 年（2021） 1 月 12 日から 2 月 12 日までの期間で共同住宅建設・店舗建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期の溝状遺構 8 条、土坑 7 基、平安時代から中世までの溝状遺構 6 条、井戸跡 1 基、土坑 11 基、近世の井戸跡 1 基、土坑 9 基である。出土遺物は、弥生土器、古墳時代前期の土師器、平安時代の土師器、須恵器、丸鞆、陶磁器、近世土器、銭貨が出土した。特に丸鞆は市内で初めて確認されたもので、平安時代の様相を知る上で貴重な成果である。

本調査は第 11 次発掘調査となる。令和 3 年（2021） 7 月 12 日から 8 月 25 日までの期間で個人住宅建設に伴う緊急発掘調査として市教委が実施した。検出した遺構は、弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝状遺構 2 基、溝状遺構 6 条、土坑 4 基、平安時代から中世の溝状遺構 1 条、時期不明のピット 9 基を検出した。遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土師器、古墳時代の形象埴輪片、平安時代の須恵器、近世の陶磁器が出土した。

第４節　基本土層

基本土層は、E・F―１グリッドで観察した（第７図・図版５―８）。地表面の標高は概ね 3.8 m前後である。表土層から深さ 1.2 m下までの堆積層をⅧ層に細分した。

Ⅰ層は表土層である。現代の撹乱の影響を受けている。Ⅱ層とⅢ層は砂質の灰褐色土である。しまりやや強く、粘性はない。Ⅲ層は、調査区内では部分的にしか確認されていない。Ⅱ・Ⅲ層ともに近世以降の耕作土層とみられる。Ⅳ層は黒褐色土層で、粘性・しまり共にあり遺構覆土に近似する。調査区北西側で厚く堆積しているため、一部の場所で２層に分けている。Ⅴ層は黄橙色シルトである。しまり強く、粘性が弱い。Ⅳ層を多く含む。本層が遺構確認面であり、標高は概ね 3.0m から 3.1 mを測る。東から西へ緩やかに傾斜しており、顕著な地形の起伏はみられない。第Ⅵ層・Ⅶ層は黄橙色シルト層で、しまり・粘性ともに強く、酸化鉄を含む。酸化鉄の量と土色によって２層に分けた。Ⅷ層は、灰白色の砂質シルト層で、溝状遺構などは、大体この層まで掘りこまれている。土層中に葦・萱などの植物痕が顕著に確認できるため静水的な環境で堆積したものと考えられる。

基本土層　土層説明

A-A′

Ⅰ　表土

Ⅱ　7.5YR5/2 灰褐色土　しまりやや強い　粘性なし　砂少量含む　近世以降の耕作土

Ⅲ　7.5YR4/2 灰褐色土　しまりやや強い　粘性なし　近世以降の耕作土

Ⅳ　10YR3/2 黒褐色土　しまりやや強い　粘性あり　白色粒子少量、Ⅴ層少量含む
遺構覆土に近似する。調査区北西側では厚く堆積し、色調のより黒い層を２層としている

Ⅴ　10YR7/4 にぶい黄橙色シルト　しまり強い　粘性弱い　Ⅳ層多量に含む
一部の範囲では堆積層の上面に酸化鉄が溜まる　遺構確認面

Ⅵ　10YR6/4 にぶい黄橙色シルト　しまり強い　粘性やや強い　酸化鉄多量含む

Ⅶ　7.5YR7/4 にぶい橙色シルト　しまり強い　粘性強い　酸化鉄少量含む

Ⅷ　10YR7/1 灰白色砂質シルト　しまり弱い　粘性弱い　Ⅶ層少量含む

第７図　基本土層図

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

１　周溝状遺構

第１号周溝状遺構－ SX01

遺構（第８・９図　図版２－２～７、３－３、４－８）

位置：B ～ F － 1 ～ 4 グリッド。重複関係：SD03・06 及び SK01 に切られ、SX02 を切る。平面形・規模：南西側を開口部とし、北構の北端と南溝の東端は調査区外に伸びている。北溝は、長さ 8.1m、上端幅が 1.58 ～ 1.80m、下端幅 1.20 ～ 1.40m。南構は、長さ 9.7m、上端幅が 1.18 ～ 1.38m、下端幅 0.95 ～ 1.08m、確認面からの深さはそれぞれ 0.44 ～ 0.60m である。断面形状は、逆台形状である。主軸方位：N － 65°－ E。覆土：５箇所で覆土を観察し、12 層に分層した。北西コーナー部分では最下端の 11 層は粘性の強い黒色粘土であり、その上の３・４・９層は黄褐色土を主体とし斜めに堆積しているため、人為的な埋め戻し層とみられ、溝を再構築したと考えられる。

遺物（第 10・11 図、第２表、図版２－８、３－１、６－１～ 11、７－ 12 ～ 14）

出土状況：本遺構からは、456 点、4687.5 ｇの遺物が出土した。土師器 452 点、4619.2 ｇ、須恵器２点、45.3 ｇ、石製品２点、23.0 ｇである。この内 14 点を図化した。遺物は、北構先端部の上層から中層にかけて多く出土した。また下層からは台付甕（８）などが出土しているのみで、ほとんど出土していない。この内壺底部（２）は内面が赤彩されているため、壺の破損後に赤彩用のパレットとして再利用したとみられる。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

第２号周溝状遺構－ SX02

遺構（第 12 図　図版３－２、３）

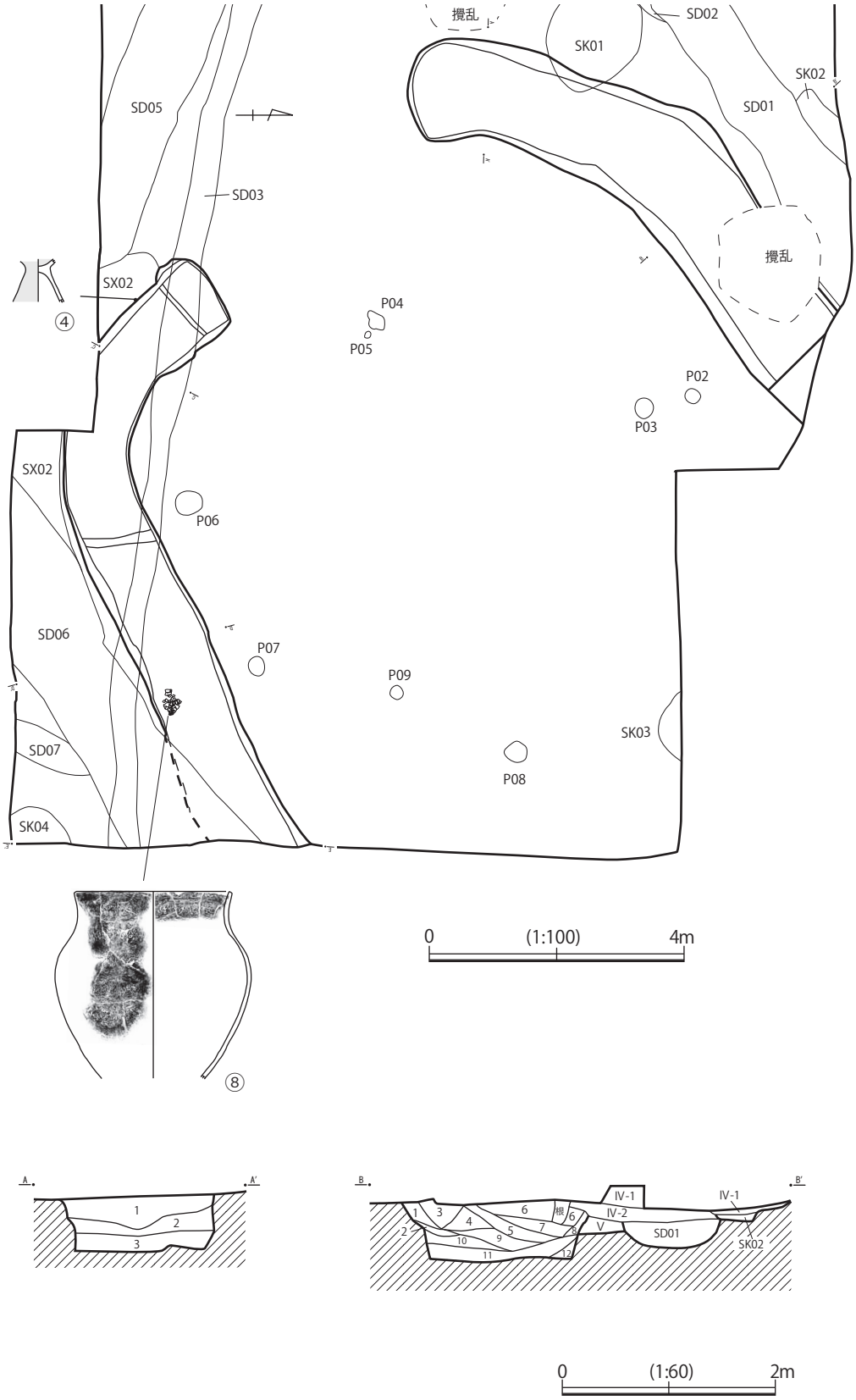
位置：C・D － 3 ・ 4 グリッド。重複関係：SX01、SD05・06 に切られる。平面形・規模：南壁際に位置し一度調査区外に伸び、その後南壁から東に伸びる。確認された部分については、北西から東に向けて緩やかに弧を描いている。東側は、SX01 と SD06 に切られているため、全体の形状は不明である。確認されている長さは、北西側 2.1 ｍと東側 1.2m、上端幅が 0.64 ～ 0.72m、下端幅 0.42 ～ 0.60m。確認面からの深さは 0.30m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 65°－ E。覆土：２箇所で覆土を観察した。５層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 13 図、第３表、図版７－１）

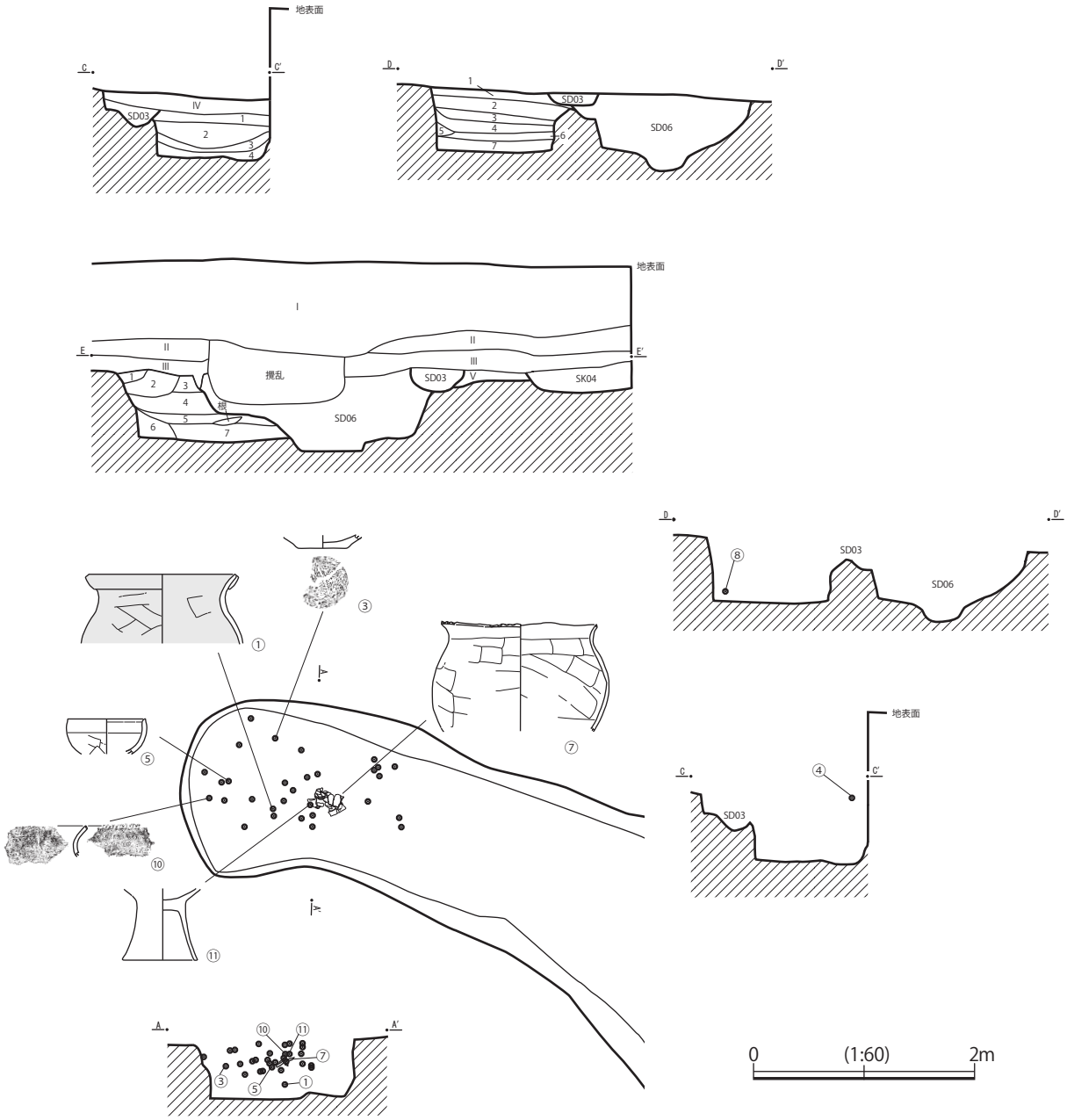
出土状況：本遺構からは、土師器１点、95.0 ｇの遺物が出土し、図化した。

時期

切り合い関係及び出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



第８図　第１号周溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SX01）（１）



SX01 土層説明

A-A′

1　10YR2/3　黒褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　粒子粗い
2　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い　酸化鉄多量含む
3　10YR2/1　黒色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　地山少量含む

B-B′

1　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い　地山中量含む
2　10YR3/2　黒褐色土　しまり強い　粘性やや強い
3　10YR5/4　にぶい黄褐色シルト　しまりやや弱い　粘性なし　黒褐色土中量含む
4　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　しまりやや強い　粘性なし　黒褐色土少量含む
5　10YR3/4　暗褐色土　しまり弱い　粘性やや強い　地山中量含む
6　10YR3/1　黒褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山多量含む
7　10YR4/1　褐灰色土　しまりやや強い　粘性弱い　酸化鉄少量と地山少量含む
8　10YR3/4　暗褐色土　しまり強い　粘性やや強い　地山多量含む
9　10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　しまりやや強い　粘性あり　黒褐色土ブロック多量含む
１０　10YR2/1　黒色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　地山少量含む
１１　10YR2/1　黒色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　地山多量含む
１２　10YR2/1　黒色土　しまり強い　粘性強い　褐色粒子少量と地山多量含む

C-C′

1　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山少量含む　粒子粗い
2　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　地山微量含む
3　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性強い　酸化鉄中量と地山中量含む
4　10YR3/1　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　地山中量含む

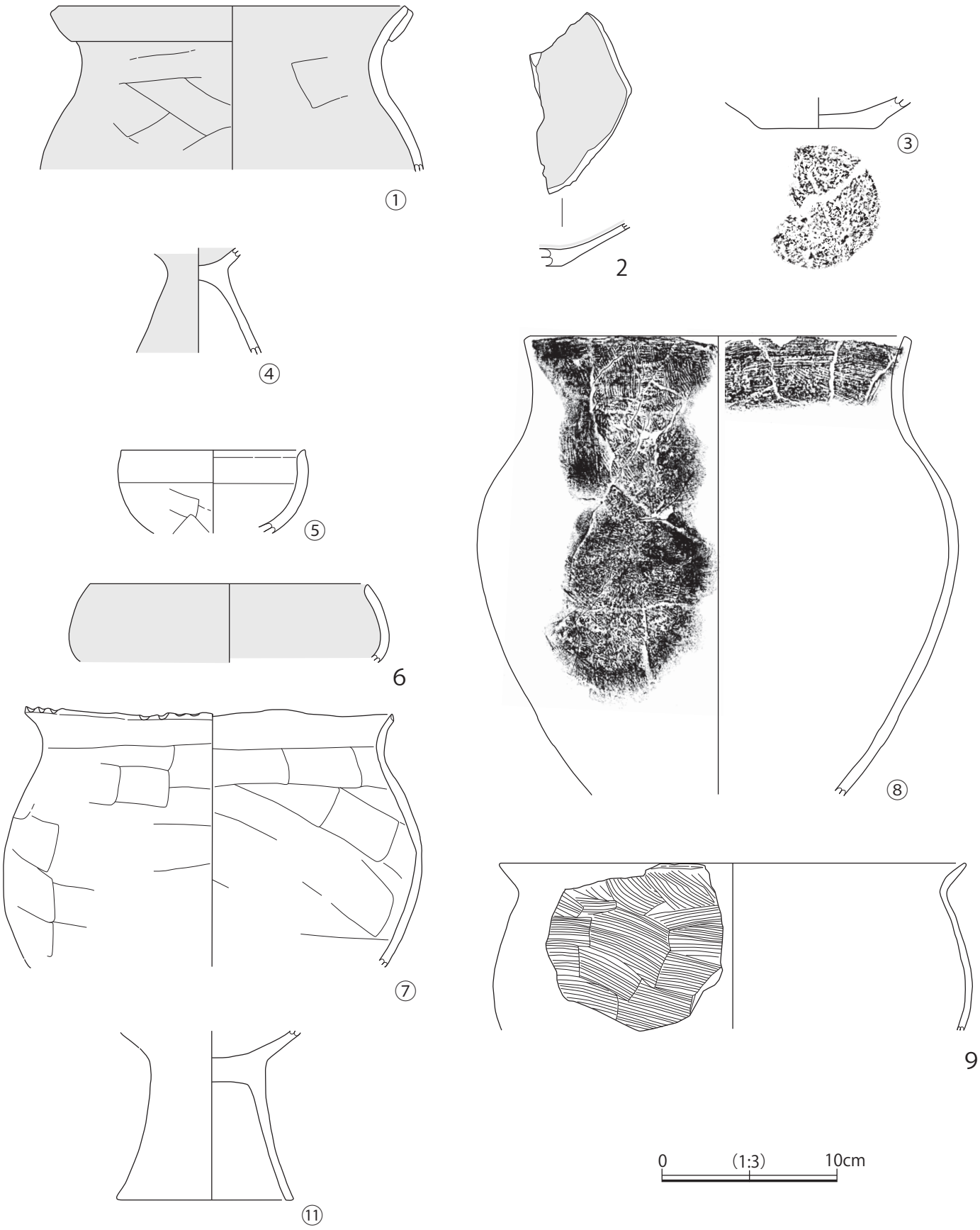
D-D′

1　10YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い　地山中量含む
2　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　地山中量含む
3　10YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　地山少量含む
4　10YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性強い　酸化鉄多量と地山微量含む
5　10YR3/1　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　酸化鉄多量含む
6　10YR3/1　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　酸化鉄少量と地山多量含む
7　10YR2/1　黒色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　酸化鉄少量と地山多量含む

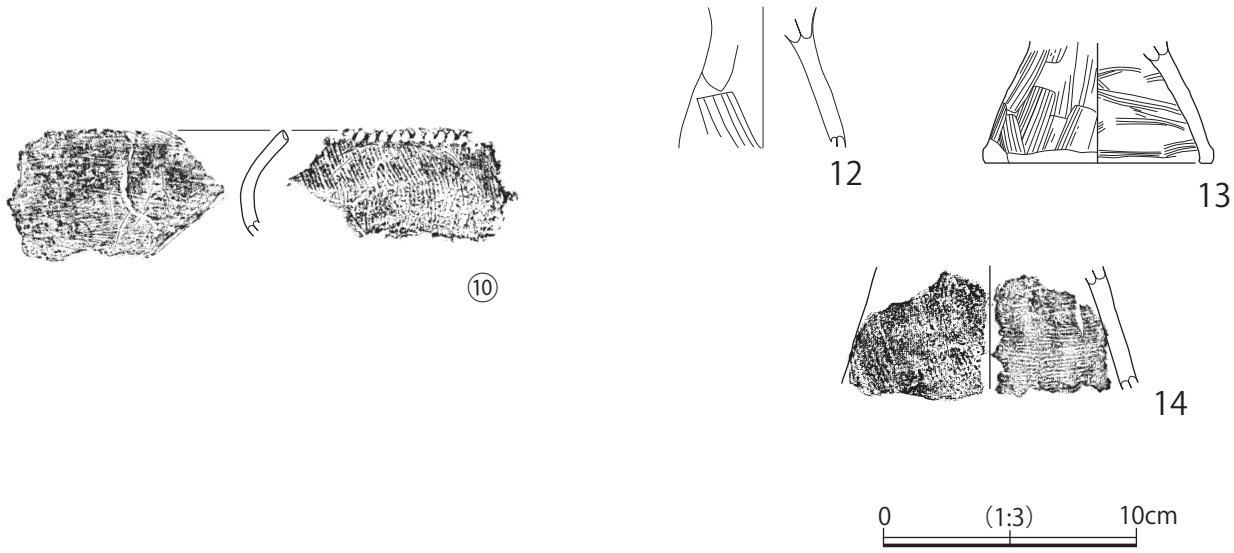
E-E′

1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや弱い　粘性やや弱い　褐色粒子微量含む
2　7.5YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　褐色粒子微量含む
3　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い
4　10YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　地山微量含む
5　10YR3/2　黒褐色土　しまり強い　粘性やや強い　酸化鉄中量と地山少量含む
6　10YR3/1　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　酸化鉄少量と地山多量含む
7　10YR2/1　黒色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　酸化鉄少量と地山多量含む

第９図　第１号周溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SX01）（２）



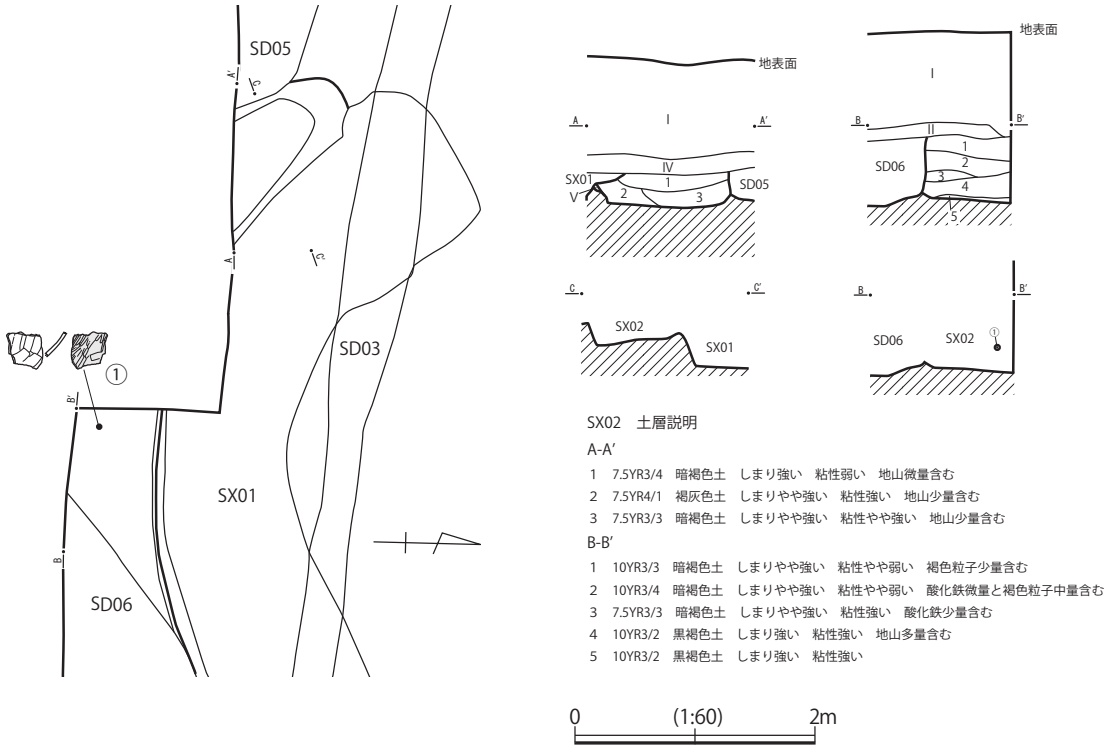
第 10 図　第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図（SX01）（1）



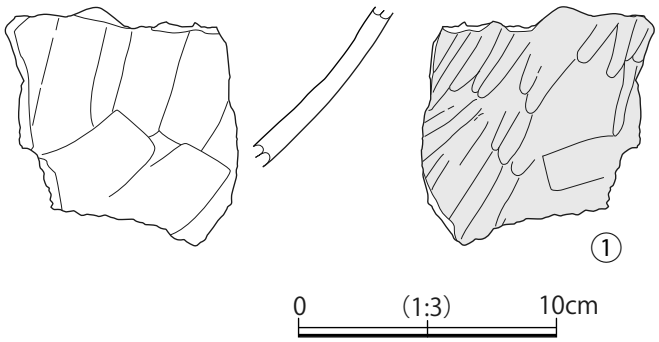
第 11 図　第 1 号周溝状遺構出土遺物実測図（SX01）（2）

第 2 表　第 1 号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
10-1	SX01	土師器 壺	口縁～ 胴部	(19.6) (9.5) –	142.8	外面	口縁部　横ナデ 胴部　ヘラナデ、赤彩	φ1～3mm赤色粒極微量 φ1mm砂中量	良	外面	明褐灰(7.5YR7/1)	内外面風化、折り返し口縁
6-(SX01)-1						内面	口縁部横ナデ、 胴部ナデ(横)、赤彩			内面	灰褐(7.5YR5/2)	
10-2	SX01	土師器 壺	底部	– (2.2) –	45.2	外面	ミガキ	φ1mm砂少量	良	外面	褐灰(10YR5/1)	破損後、赤彩用のパレットとして転用か
6-(SX01)-2						内面	ナデ(横)、赤彩			内面	褐灰(10YR4/1)	
10-3	SX01	土師器 壺	底部	– (1.8) (6.5)	88.9	外面	ナデか	φ1mm以上白色粒中量 φ2mm以上小礫中量	良	外面	褐灰(7.5YR5/1)	内外面酸化鉄付着
6-(SX01)-3						内面	ナデか			内面	明褐灰(7.5YR5/2)	
10-4	SX01	土師器 高坏	脚部	– (5.7) –	70.0	外面	ミガキ(縦)赤彩	φ1mm以下砂少量 φ1mm～2mm小礫少量	不良	外面	にぶい褐(7.5YR5/3)	内外面風化
6-(SX01)-4						内面	坏部ナデ、赤彩 脚部ナデか			内面	灰白(7.5YR8/2)	
10-5	SX01	土師器 鉢	口縁～ 胴部	(10.6) (4.8) –	25.0	外面	口縁部横ナデ 胴部ヘラナデ	φ1mm～3mm白色粒多量 φ1mm小礫少量	不良	外面	褐灰(7.5YR5/1)	内面酸化鉄多量に付着
6-(SX01)-5						内面	ナデか			内面	褐灰(7.5YR4/1)	
10-6	SX01	土師器 鉢	口縁～ 胴部	(16.0) (4.5) –	35.0	外面	ヘラナデ(横)→ミガキ？、赤彩	φ1mm以上白色粒中4量 φ1mm以下砂少	良	外面	浅黄橙(7. 5YR8/6)	内外面風化
6-(SX01)-6						内面	ヘラナデ(横)、赤彩			内面	浅黄橙(7. 5YR8/5)	
10-7	SX01	土師器 台付甕	口縁～ 胴部	21.1 (15.0) –	695.0	外面	口縁部横ナデ、 胴部ヘラナデ(横)	φ1mm以下白色粒少量 φ2mm以上小礫中少量 φ1mm以下砂中量	良	外面	灰黄褐(10YR5/2)	NO.11と同一か、酸化鉄付着
6-(SX01)-7						内面	ヘラナデ(横)			内面	褐灰(10YR5/1)	
10-8	SX01	土師器 台付甕	口縁～ 胴部	(22.2) (26.3) –	790.0	外面	ハケメ(横)→ハケメ(縦)	φ1mm以下白色粒少量 φ2mm以上小礫中少量 φ1mm以下砂中量	不良	外面	にぶい橙(7.5YR7/4)	内外面風化
6-(SX01)-8						内面	ハケメ(横)→ハケメ(縦) 胴部ヘラナデ			内面	明褐灰(7.5YR7/1)	
10-9	SX01	土師器 台付甕	口縁～ 胴部	(18.4) (9.6) –	70.1	外面	口縁部横ナデ→ハケ(縦) 胴部ハケ(横)	φ1mm砂少量 φ2mm小礫少量	良	外面	明赤褐(2.5YR5/6)	
6-(SX01)-9						内面	口縁部横ナデ→ハケ(横) 胴部ヘラナデ(横)			内面	橙(2.5YR6/6)	
11-10	SX01	土師器 台付甕	口縁	– (4.2) –	34.0	外面	口唇部刻み、ハケメ(縦)	φ1mm白色粒中量 φ2mm以上小礫少量	良	外面	褐灰(7.5YR5/1)	
6-(SX01)-10						内面	ハケメ(横)→ヘラナデ(横)			内面	褐灰(7.5YR4/1)	
10-11	SX01	土師器 台付甕	脚部	– (9.7) (10.2)	275.1	外面	ヘラナデ(縦)	φ1mm以下白色粒少量 φ2mm以上小礫中少量 φ1mm以下砂中量	良	外面	明褐灰(7.5YR7/2)	NO.7と同一か
6-(SX01)-11						内面	ヘラナデ(縦)			内面	にぶい橙(7.5YR7/4)	
11-12	SX01	土師器 台付甕	脚部	– (5.6) –	35.0	外面	ハケ→一部ナデ(縦)	φ1mm砂少量 φ2mm以上小礫少量	良	外面	にぶい橙(7.5YR6/4)	
7-(SX01)-12						内面	ナデか			内面	橙(2.5YR6/6)	
11-13	SX01	土師器 台付甕	脚部	– (4.8) (9.0)	70.0	外面	ハケ(縦)	φ1mm砂少量 φ2mm以上礫微量	良	外面	にぶい赤褐(5YR5/4)	
7-(SX01)-13						内面	ハケ(横)→ナデ(横)			内面	橙(5YR7/2)	
11-14	SX01	土師器 台付甕	脚部	– (5.6) –	25.0	外面	ハケ(縦)	φ1mm白色粒中量 φ1mm砂少量 φ2mm以上小礫微量	良	外面	にぶい橙(7.5YR7/4)	
7-(SX01)-14						内面	ハケ(横)			内面	橙(5YR6/6)	



第 12 図　第 2 号周溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SX02）



第 13 図　第 2 号周溝状遺構出土遺物実測図（SX02）

第 3 表　第 2 号周溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
13-1	SX02	土師器 壺	胴部	― (6.0) ―	95.0	外面	ヘラナデ（横）→ヘラミガキ（縦）、赤彩	φ1mm以下白色粒子微量 φ1～3mm橙色粒子多量 φ1mm小礫微量	良	外面	にぶい褐（7.5YR5/3）	
7-(SX02)-1						内面	ヘラナデ（横）			内面	褐灰（7.5YR4/1）	

２　溝状遺構

第１号溝状遺構―SD01

遺構（第 14 図　図版３－４～６）

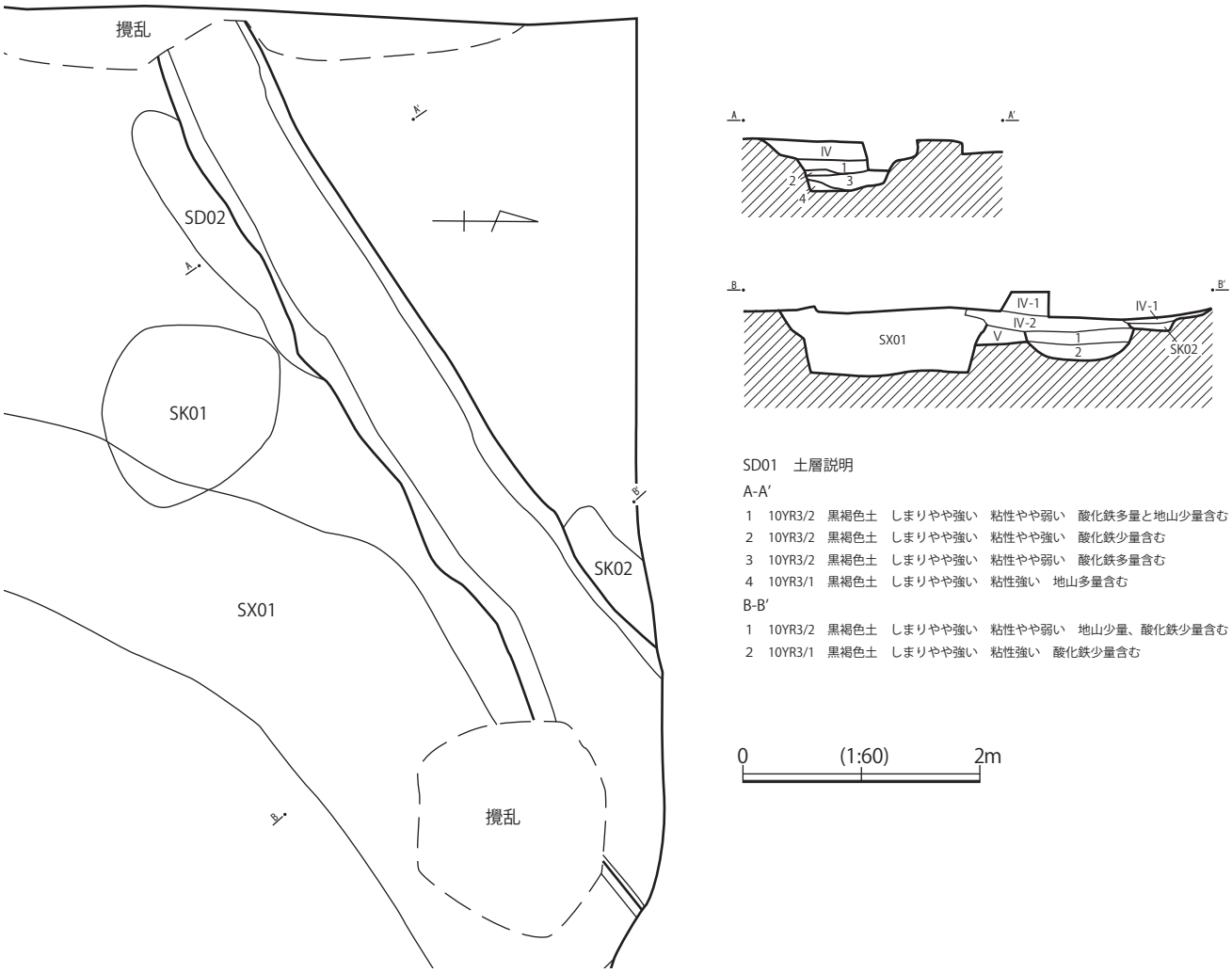
位置：Ｂ・Ｃ－１・２グリッド。重複関係：SK02 に切られ、SD02 を切る。平面形・規模：調査区の北壁から南西に伸び西壁に至る。長 7.5m、上端幅が 0.92 ～ 1.10m、下端幅 0.60 ～ 0.80m。確認面からの深さは 0.45 ～ 0.79m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 50°－ E。覆土：２箇所で覆土を観察した。４層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 15 図、第４表、図版７－１）

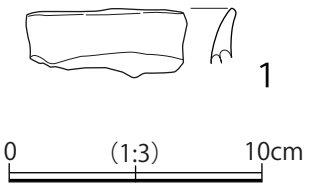
出土状況：本遺構からは、土師器９点、76.2 ｇが出土した。内１点を図化した。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



第 14 図　第１号溝状遺構実測図（SD01）



第 15 図　第 1 号溝状遺構出土遺物実測図（SD01）

第 4 表　第 1 号溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
15-1	SD01	土師器 壺	口縁部	- (2.0) -	15.1	外面	ナデ（横）	φ1mm砂少量	普通	外面	明黄褐（10YR6/8）	
7-(SD01)-1						内面	ナデ（横）			内面	にぶい黄橙（10YR6/3）	

第 2 号溝状遺構―SD02

遺構（第 16 図　図版 3 － 7）

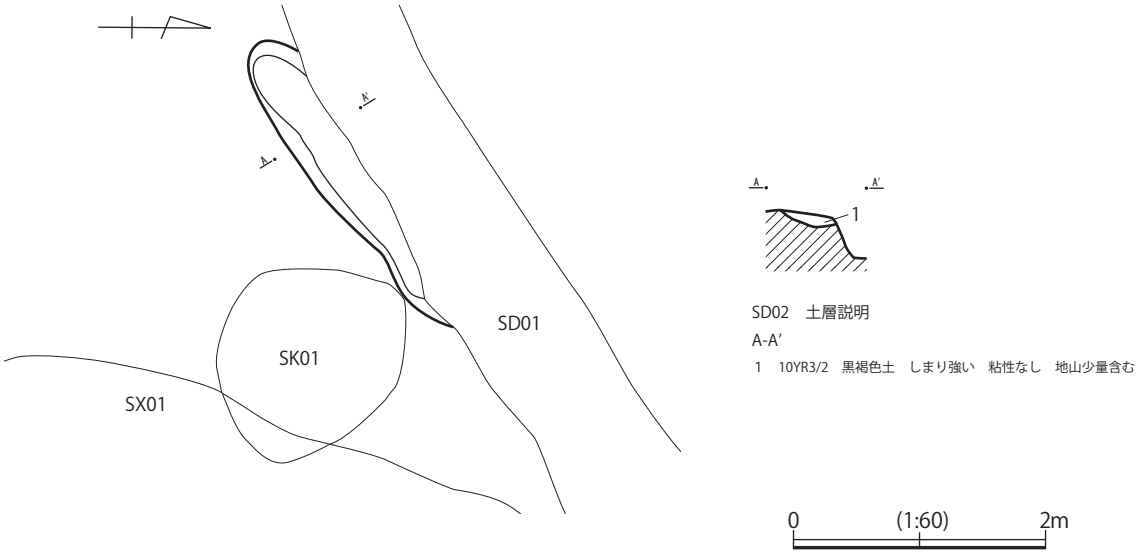
位置：B － 1 ・ 2 グリッド。重複関係：SD01 に切られる。平面形・規模：溝北側は SD01 に切られているため形状は不明、北東から南西に伸びている。確認されている規模は、長 2.0m、上端幅が 0.40 ～ 0.42m、下端幅 0.30 ～ 0.36m。確認面からの深さは 0.11 ～ 0.14m である。断面形状は、皿形の可能性がある。主軸方位：N － 58° － E。覆土：1 箇所で覆土を観察した。1 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

切り合い関係から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



第 16 図　第 2 号溝状遺構実測図（SD02）

第４号溝状遺構―SD04

遺構（第 17 図　図版４－３・４）

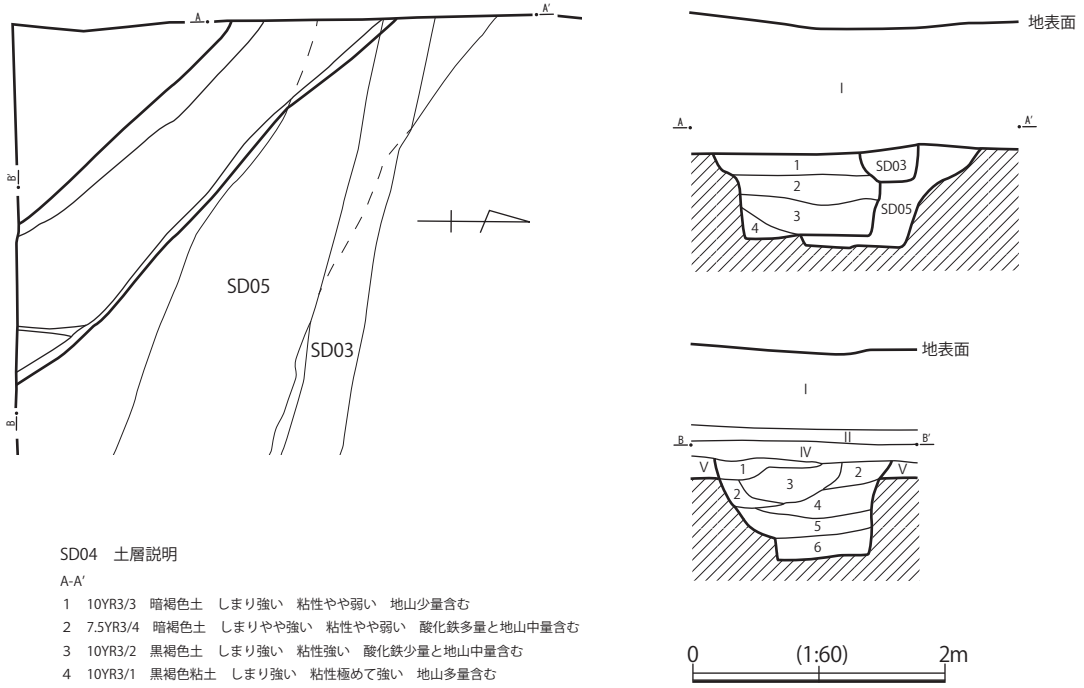
位置：A・B－３・４グリッド。重複関係：SD03 に切られ、SD05 を切る。平面形・規模：調査区の南壁から北西に伸び西壁に至る。長 3.5m、上端幅が 0.90 ～ 0.94m、下端幅 0.55 ～ 0.77m。確認面からの深さは 0.57 ～ 0.69m で、北西に向かって傾斜している。断面形状は、逆台形である。主軸方位:N － 42°－ W。覆土:２箇所で覆土を観察した。６層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況:本遺構からは、14 点、183.1 ｇの遺物が出土した。土師器 13 点、177.6 ｇ、陶磁器１点、5.5 ｇである。陶磁器は流れ込みと思われる。全て破片資料で図示出来なかった。

時期

遺構形状及び出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



SD04　土層説明

A-A'

1　10YR3/3　暗褐色土　しまり強い　粘性やや弱い　地山少量含む
2　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い　酸化鉄多量と地山中量含む
3　10YR3/2　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　酸化鉄少量と地山中量含む
4　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　地山多量含む

B-B'

1　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山中量含む
2　10YR3/3　暗褐色土　しまり強い　粘性やや弱い　地山少量含む
3　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山ブロック極めて多量含む
4　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い　酸化鉄多量と地山中量含む
5　10YR3/2　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　酸化鉄少量と地山中量含む
6　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　酸化鉄少量と地山多量含む

第 17 図　第４号溝状遺構実測図（SD04）

第５号溝状遺構―SD05

遺構（第 18 図　図版４－５・６）

位置：A ～ C － ３・４グリッド。重複関係：SD03・04 に切られ、SX02 を切る。平面形・規模：調査区南壁から北西に伸び、西壁に至る。確認されている規模は、長 7.5m、上端幅が 0.84 ～ 1.13m、下端幅 0.36 ～ 0.48m。確認面からの深さは 0.54 ～ 0.78m である。断面形状は、逆台形である。

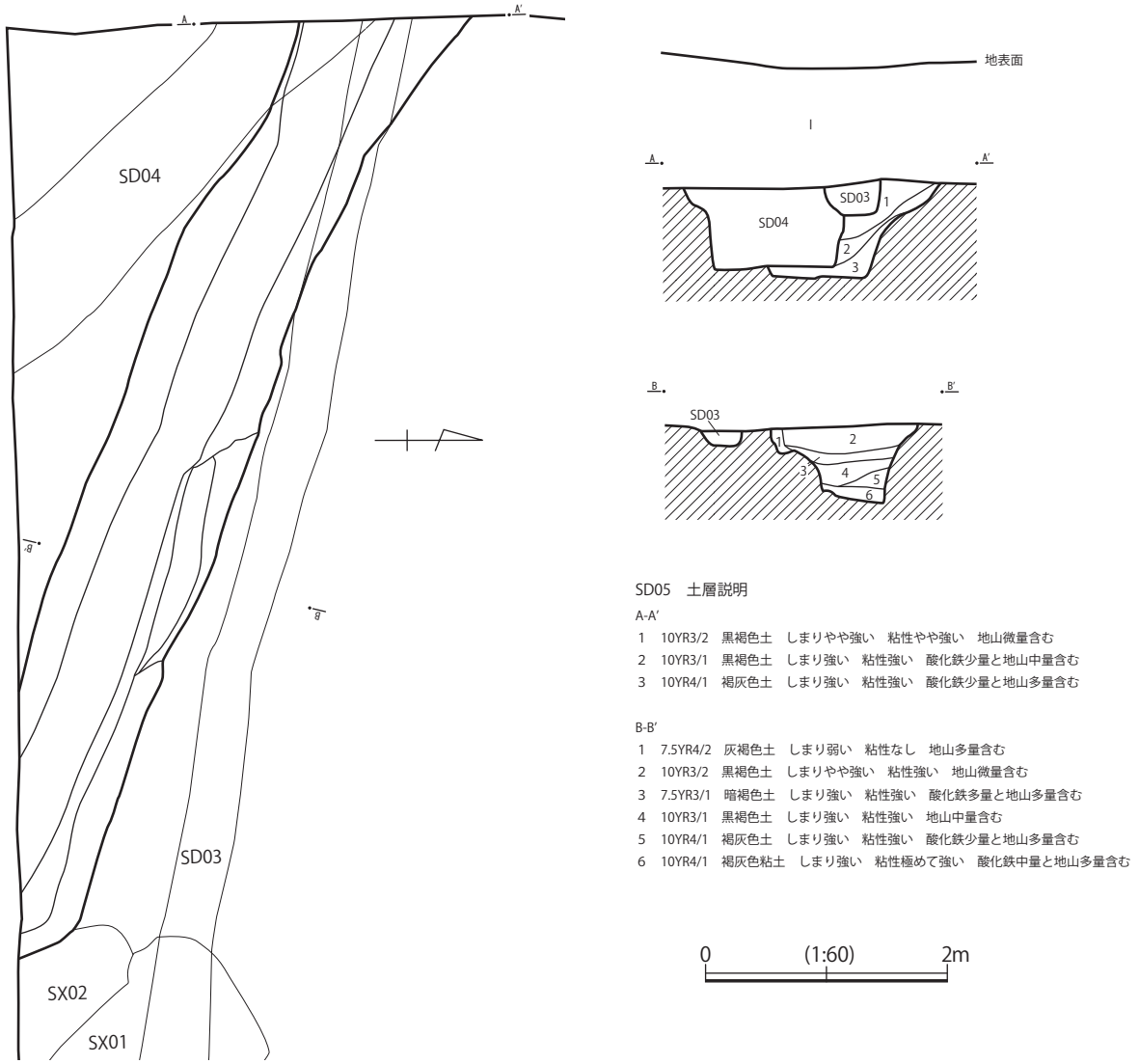
主軸方位：N － 58°－ W。覆土：２箇所で覆土を観察した。６層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

切り合い関係から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



第 18 図　第 5 号溝状遺構実測図（SD05）

第６号溝状遺構―SD06

遺構（第 19 図　図版４－７・８、５－１）

位置：D ～ F － 3・4 グリッド。重複関係：SD03 に切られ、SX01・02、SD07 を切る。平面形・規模：調査区の南壁から北東に伸び東壁に至る。長 5.5m、上端幅が 0.90 ～ 1.30m、下端幅 0.58 ～ 0.86m。確認面からの深さは 0.45 ～ 0.79m である。断面形状は、逆台形であり、中央に段差がつく。主軸方位：

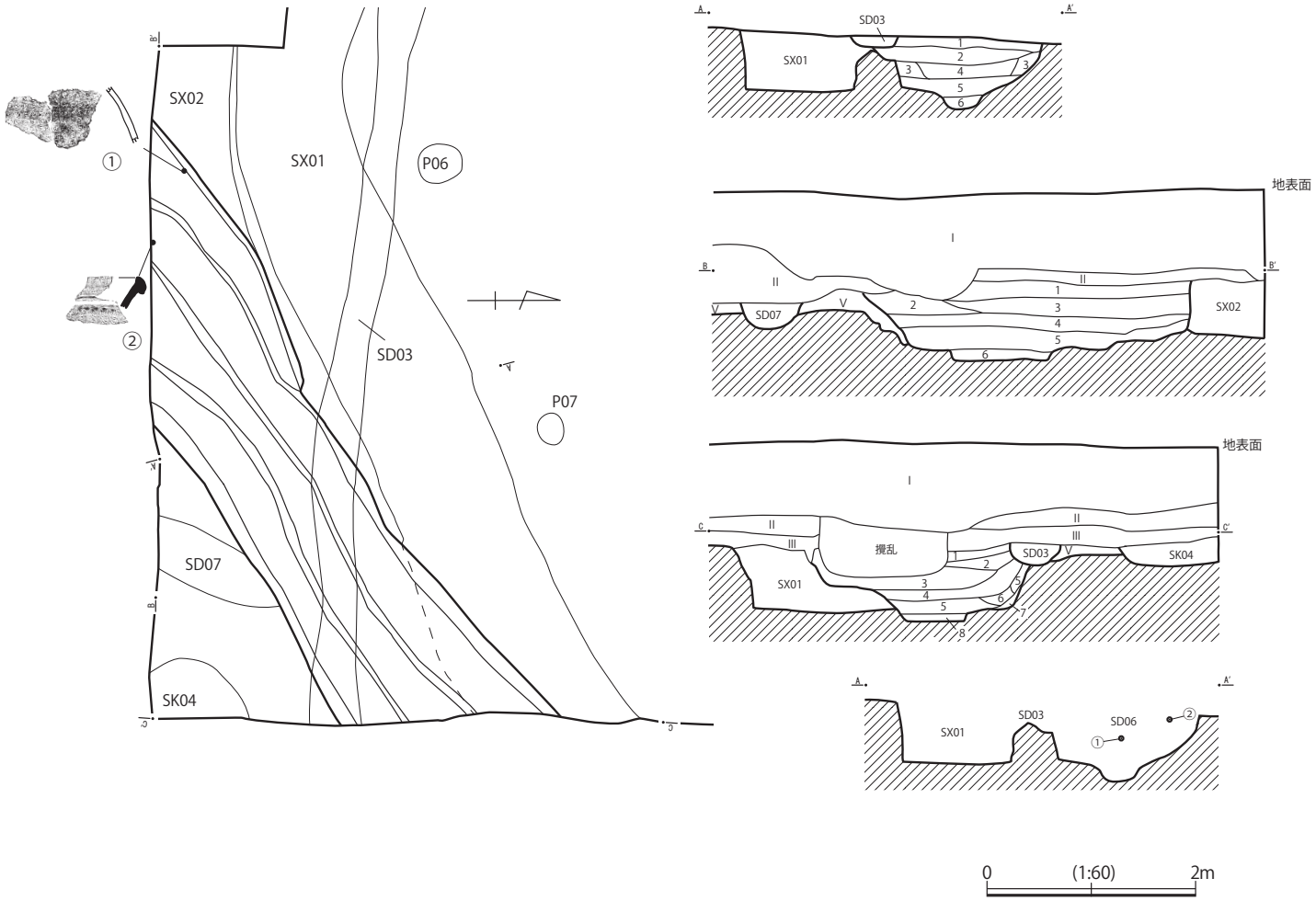
N－60°－E。覆土：３箇所で覆土を観察した。８層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 20 図、第５表、図版７－１・２）

出土状況：本遺構からは、86 点、970.1 ｇの遺物が出土した。土師器 84 点、909.7 ｇ、須恵器１点、57.5 ｇ、陶磁器１点、2.9 ｇである。このうち土師器１点、須恵器１点を図化した。須恵器は遺構上層より出土している。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



SD06　土層説明

A-A′

1　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　褐色粒子少量と地山微量含む
2　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　酸化鉄少量と地山少量含む
3　10YR4/1　褐灰色土　しまりやや強い　粘性やや強い　酸化鉄多量と地山中量含む
4　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性強い　酸化鉄中量と地山ブロック極めて多量含む
5　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　地山多量含む
6　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性極めて強い

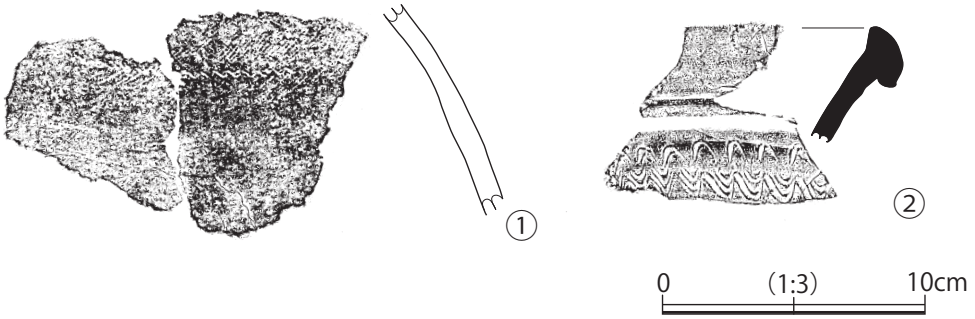
B-B′

1　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　褐色粒子少量と酸化鉄少量、地山多量含む
2　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性弱い
3　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　褐色粒子多量含む
4　7.5YR3/4　暗褐色土　しまり強い　粘性強い　酸化鉄多量含む
5　10YR3/2　黒褐色土　しまり強い　粘性強い　地山多量含む
6　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性極めて強い　地山少量含む

C-C′

1　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや弱い　粘性なし　褐色粒子少量含む
2　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　酸化鉄少量含む
3　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　褐色粒子多量含む
4　10YR3/2　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　酸化鉄中量と褐色粒子中量含む
5　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性強い　地山中量含む
6　10YR4/1　褐灰色粘土　しまり強い　粘性強い　地山中量含む
7　10YR5/2　灰黄褐色粘土　しまりやや強い　粘性強い　地山多量含む
8　10YR3/1　黒褐色粘土　しまり強い　粘性極めて強い

第 19 図　第６号溝状遺構実測図・遺物出土状況図（SD06）



第 20 図　第 6 号溝状遺構出土遺物実測図（SD06）

第 5 表　第 6 号溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
20-1	SD06	土師器 壺	胴部	- (7.5) -	105.3	外面	LR縄文をZ字状結節文で区画、胴部ミガキ（横）、赤彩	φ1mm以下砂中量 φ1mm小礫少量	良	外面	明褐灰（7.5YR7/1）	
7-(SD06)-1						内面	ナデ（横）			内面	褐灰（7.5YR6/1）	
20-2	SD06	須恵器 甕	口縁～ 胴部	- (4.4) -	57.5	外面	ロクロ整形、櫛描きによる波状文2段	φ1mm砂少量	良	外面	黄灰（2.5Y6/1）	
7-(SD06)-2						内面	ロクロ整形			内面	黄灰（2.5Y6/1）	

第 7 号溝状遺構―SD07

遺構（第 21 図　図版 5 － 2）

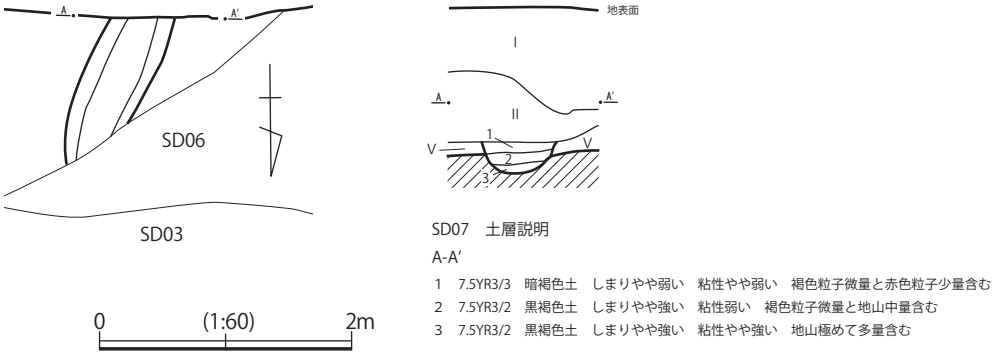
位置：E － 4 グリッド。重複関係：SD06 に切られる。平面形・規模：調査区南壁から北東に進み、SD06 に切られる。長 1.1m、上端幅が 0.48 ～ 0.54m、下端幅 0.25 ～ 0.29m。確認面からの深さは 0.15 ～ 0.20m である。断面形状は、半円形。主軸方位：N － 25°－ E。覆土：1 箇所で覆土を観察した。3 層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

切り合い関係と覆土から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



第 21 図　第 7 号溝状遺構実測図（SD07）

３　土坑

第１号土坑―SK01

遺構（第 22 図　図版５－３、４）

位置：B・C －１・２グリッド。重複関係：SX01 を切る。平面形・規模：円形を呈する。長軸 1.59m、短軸 1.41m、深さは 0.31m である。断面形状は、浅い皿状である。主軸方位:N － 60°－ W。覆土：1 箇所で覆土を観察した。４層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 23 図、第６表、図版７－１）

出土状況：本遺構からは、３点、55.6 ｇが出土している。全て土師器で、この内１点を図化した。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

第２号土坑―SK02

遺構（第 22 図　図版３－５、6）

位置：C －１グリッド。重複関係：SD01 を切る。平面形・規模：調査区北側に伸びているため全景は不明であるが、検出している形状では方形を呈する。確認されている長軸 1.02m、短軸 0.42m、深さは 0.06m である。断面形状は、浅い皿状である。主軸方位：N － 45°－ E。覆土：1 箇所で覆土を観察した。１層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

遺構覆土から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

第３号土坑―SK03

遺構（第 22 図　図版５－５）

位置:E －１グリッド。重複関係:切り合い関係なし。平面形・規模:調査区北壁際で検出したため、全体の形状は不明であるが、円形を呈するとみられる。長軸 1.08m、短軸 0.36m、深さは 0.18m である。断面形状は、浅い皿状である。主軸方位：不明。覆土：1 箇所で覆土を観察した。２層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 23 図、第６表、図版７－２）

出土状況:本遺構からは、15 点、186.5 ｇが出土している。土師器 14 点、176.9 ｇ、須恵器１点、9.6 ｇである。この内土師器１点を図化した。

時期

出土遺物から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。

第４号土坑―SK04

遺構（第 22 図　図版５－６）

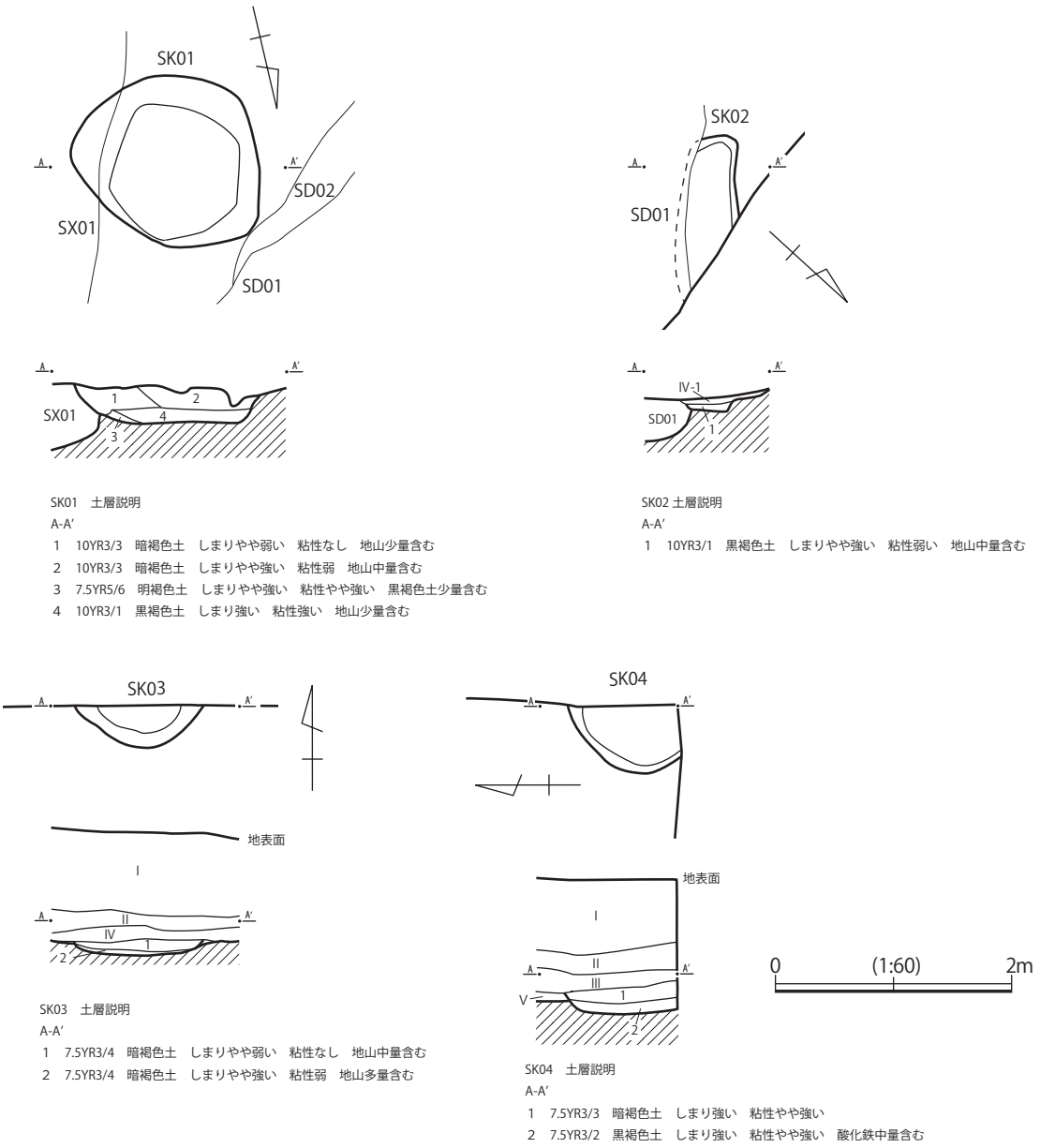
位置：E・F－4グリッド。重複関係：切り合い関係なし。平面形・規模：調査区南東壁際で検出したため、全体の形状は不明であるが、円形を呈するとみられる。検出した規模は長軸0.90m、短軸0.54m、深さは0.22mである。断面形状は、浅い皿状である。主軸方位：不明。覆土：1箇所で覆土を観察した。2層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物

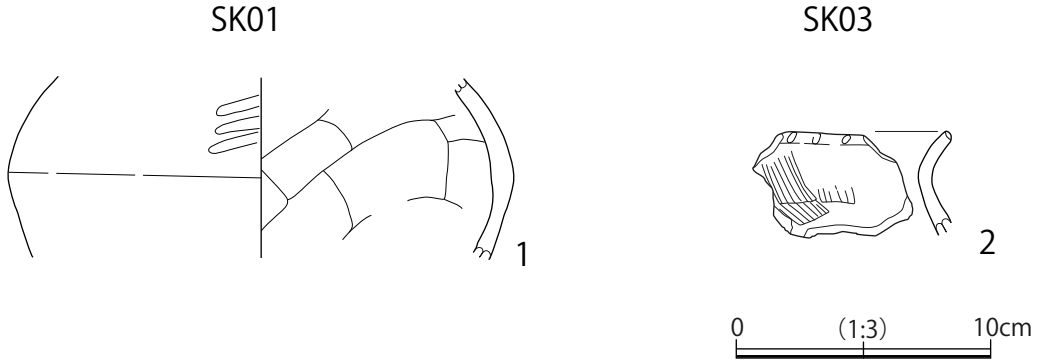
出土状況：本遺構からは、遺物は出土していない。

時期

遺構覆土から、弥生時代後期後半から古墳時代前期と考えられる。



第22図　第1・2・3・4号土坑実測図（SK01・02・03・04）



第 23 図　第１・３号土坑出土遺物実測図（SK01・03）

第６表　第１・３号土坑出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
23-1	SK01	土師器 壺	胴部	－ (7.1) －	102.8	外面	ミガキ	φ2mm以下白色粒子小量 φ1mm以下石英極少量	良	外面	にぶい褐(7. 5YR6/3)	
7-(SK01)-1						内面	ナデ(横)			内面	にぶい橙(7. 5YR6/4)	
23-2	SK03	土師器 甕	口縁部	－ (4.1) －	20.0	外面	口唇部刻み目 口縁部ハケ(縦)	φ1mm以下白色粒子小量 φ2mm以下小礫極少量	普通	外面	にぶい橙(7. 5YR7/4)	
7-(SK03)-2						内面	ナデ(横)			内面	褐灰(7. 5YR6/1)	

第２節　平安時代から中世の遺構と遺物

１　溝状遺構

第３号溝状遺構―SD03

遺構（第 24 図　図版３－８、４－１・２）

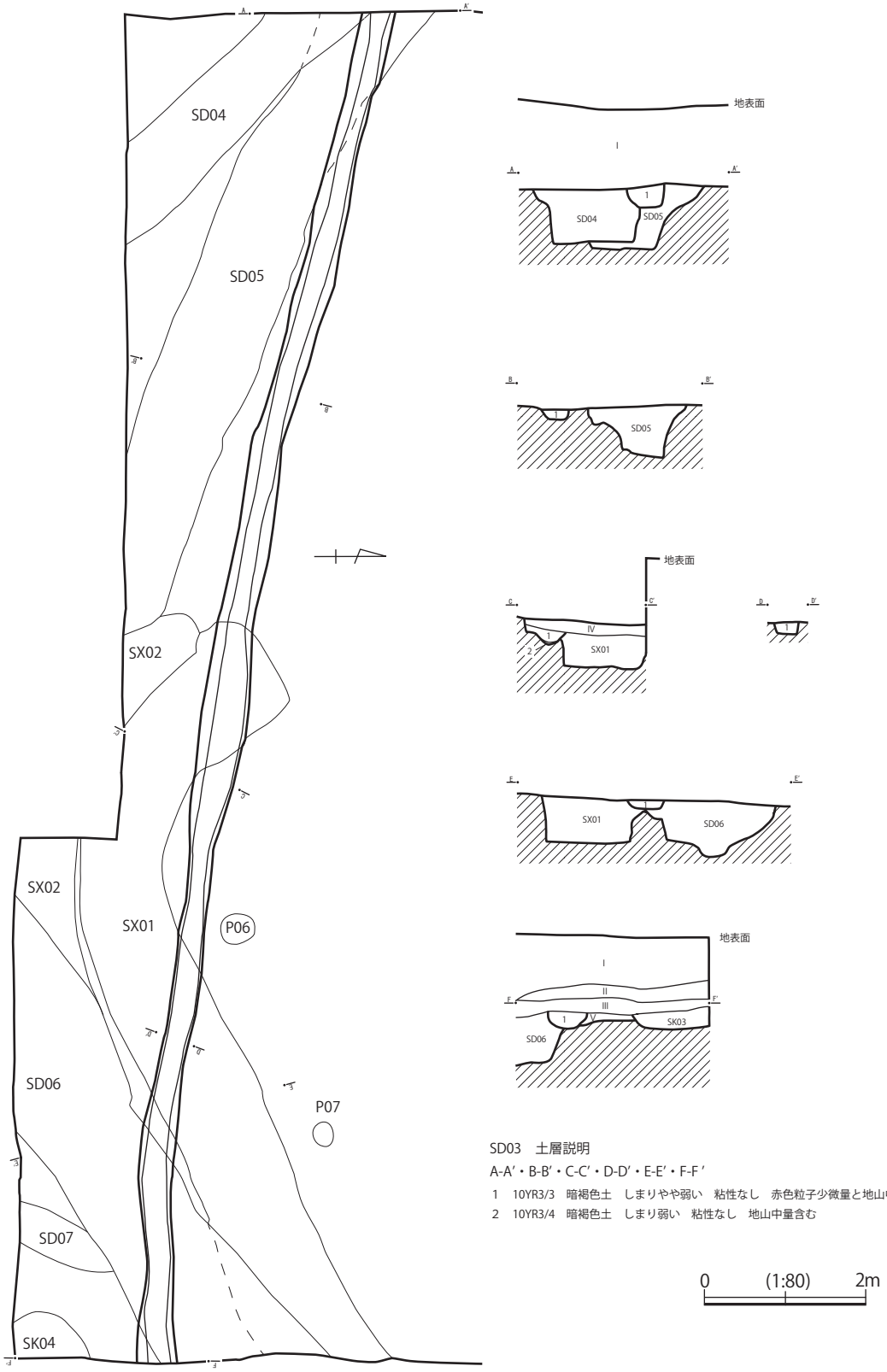
位置：A ～ F － 3 ・ 4 グリッド。重複関係：SX01、SD04・05・06 を切る。平面形・規模：調査区の東壁からほぼ直線に伸び西壁に至る。長 17.1m、上端幅が 0.30 ～ 0.41m、下端幅 0.20 ～ 0.31m。確認面からの深さは 0.11 ～ 0.24m である。断面形状は、逆台形である。主軸方位：N － 76 ° － W。覆土：６箇所で覆土を観察した。２層に分層し、自然堆積であると考えられる。

遺物（第 25 図、第７表、図版７－１～３）

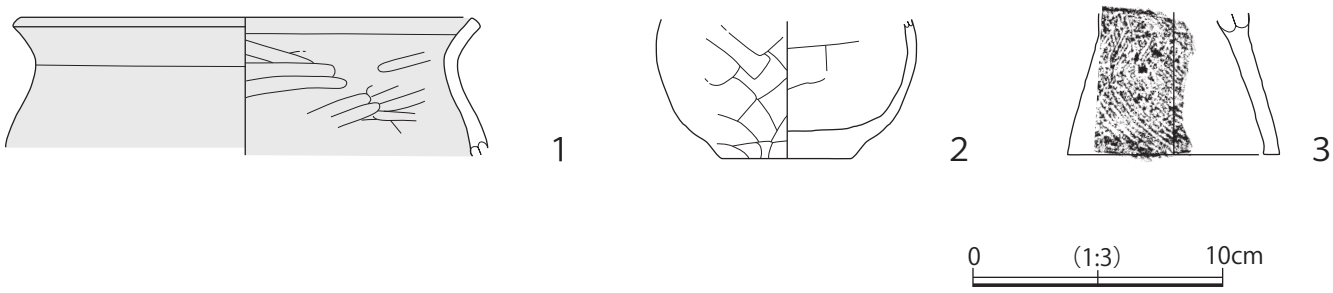
出土状況：本遺構からは、15 点、152.8 ｇの遺物が出土した。土師器 11 点、100.3 ｇ、須恵器２点、20.6 ｇ、石２点、31.9g である。内３点を図化した。いずれも弥生時代後半から古墳時代前期の土師器で、周囲からの流れ込みと考えられる。

時期

遺物は流れ込みが多く　時期を判断することは難しいが、土層と切り合い関係から平安時代から中世と考えられる。



第 24 図　第 3 号溝状遺構実測図（SD03）



第 25 図　第 3 号溝状遺構出土遺物実測図（SD03）

第 7 表　第 3 号溝状遺構出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
25-1	SD03	土師器 壺	口縁部 ～胴部	(18.8) (5.5) -	35.0	外面	ナデ（横）、ミガキ（横）、赤彩	φ1mm以下白色粒子微量	良	外面	淡橙(5R8/3)	
7-(SD03)-1						内面	ナデ（横）、ミガキ（横）、赤彩			内面	淡橙(5R8/3)	
25-2	SD03	土師器 鉢	底部～ 胴部	— (5.6) (5.2)	35.0	外面	ナデ（縦）	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm以下砂微量	普通	外面	灰褐(7.5YR6/2)	内面風化
7-(SD03)-2						内面	ナデ（横）			内面	褐灰(7.5YR4/1)	
25-3	SD03	土師器 台付甕	脚部	— (5.7) (8.6)	45.0	外面	ハケメ(縦)	φ1mm以下白色粒子微量 φ2mm以上小礫微量 φ1mm以下砂微量	良	外面	橙(2.5YR6/8)	
7-(SD03)-3						内面	ヘラナデ（横）			内面	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	

第 3 節　その他の遺構と遺物

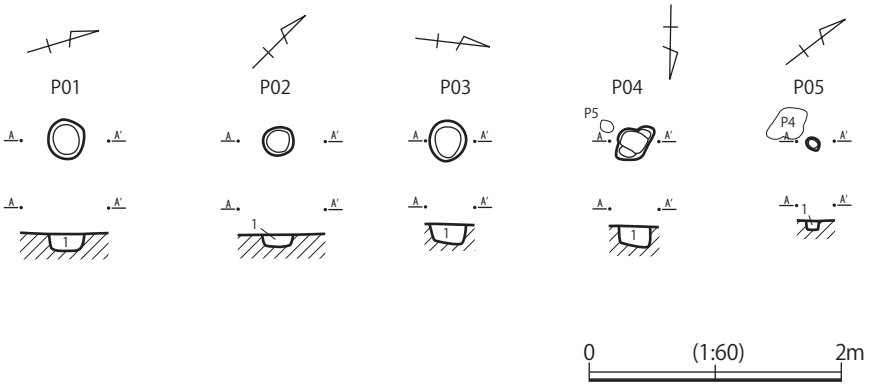
1　ピット

遺構（第 26・27 図　第 8 表）

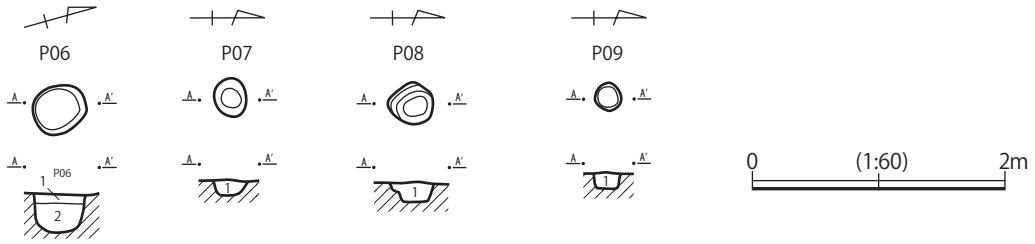
本調査では、全部で 9 基のピットを検出した。このうち SX01 の内側では P02 から P09 までを検出したが、規則性などは確認できなかった。計測値等は第 8 表に示した。

遺物（第 8 表）

出土状況：ピット 5 から須恵器 1 点、0.7 g の遺物が出土した。破片資料で図示できなかった。



第 26 図　第 1 ～ 9 号ピット実測図（P01 ～ 09）（1）



P1　土層説明
A-A′
1　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　地山少量含む

P2　土層説明
A-A′
1　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性やや弱い　地山微量含む

P3　土層説明
A-A′
1　10YR3/2　黒褐色土　しまりやや強い　粘性弱い　地山多量含む

P4　土層説明
A-A′
1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山中量含む

P5　土層説明
A-A′
1　7.5YR3/4　暗褐色土　しまりやや弱い　粘性なし　地山少量含む

P6　土層説明
A-A′
1　10YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性やや強い　地山少量含む
2　10YR4/1　褐灰色土　しまりやや弱い　粘性弱い　暗褐色土多量含む

P7　土層説明
A-A′
1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性弱　地山少量含む

P8　土層説明
A-A′
1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山少量含む

P9　土層説明
A-A′
1　7.5YR3/3　暗褐色土　しまりやや強い　粘性なし　地山中量含む

第 27 図　第 1 ～ 9 号ピット実測図（P01 ～ 09）（2）

第 8 表　ピット計測表

遺構名	位置（グリッド）	平面形状	長軸長（m）	短軸長（m）	深さ（m）	出土遺物	備考
P01	B-3	円形	0.32	0.28	0.14	なし	
P02	D- 1	円形	0.24	0.24	0.10	なし	
P03	D- 1	円形	0.32	0.29	0.17	なし	
P04	C・D-2・3	楕円形	0.37	0.26	0.16	なし	
P05	D-3	円形	0.12	0.10	0.08	須恵器1点　0.7g	
P06	D-3	円形	0.42	0.39	0.31	なし	
P07	E- 3	楕円形	0.31	0.25	0.13	なし	
P08	E- 2	円形	0.35	0.41	0.16	なし	
P09	E- 2	不整形	0.22	0.20	0.13	なし	

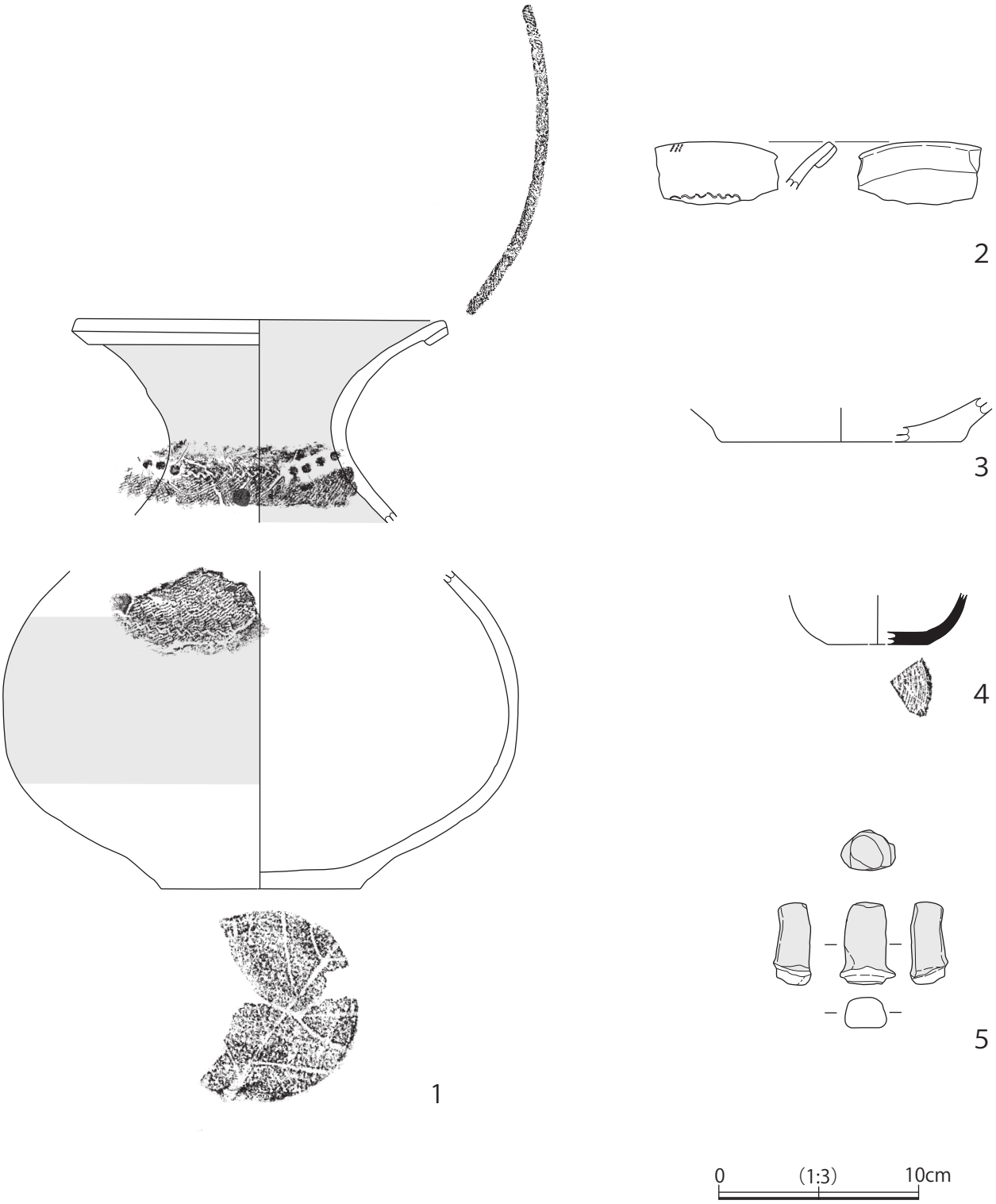
2　遺構外出土遺物

遺物（第 28 図、第 9 表、図版 5 － 7 、 8 － 1 ～ 5 ）

本調査では、試掘調査時に出土した物を含め遺構外から 153 点、2040.4 g の遺物が出土した。土師器 124 点、1688.6 g 、須恵器 19 点、254.2 g 、石製品 2 点、46.6 g 、陶磁器 5 点、24.3 g 、その他不明遺物 3 点、26.7g である。

このうち 5 点を図化した。他のものは第 8 表に遺構出土遺物及び遺構外出土遺物の点数、重量を示した。壺型土器（1）は、調査区北西壁際でまとまって出土した。胴部上半が欠落しているが、破

片資料から単節縄文を一条のＺ字状結節文で区画した文様帯２段で構成されていると考えられ、２段とも円形朱文を配置している。形象埴輪（５）は、全体が赤彩されたもので、形象埴輪の一部とみられる。



第 28 図　遺構外出土遺物実測図

第 9 表　遺構外出土遺物観察表

挿図番号 図版番号	出土遺構	種別 器種	部位	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
28-1	遺構外	土師器 壺	口縁部～胴部、胴部～底部	(19.0) (9.9・16.0) (10.0)	800.0	外面	口唇部LR縄文、口縁部横ナデ→ヘラミガキ（縦・横）、胴部LR縄文をZ字状結節文で区画する文様体が2段、区画中央部には円形朱文。1段目文様体上部に4個1単位の円形浮文を4箇所、文様帯以外を赤彩	φ1mm以下白色粒子微量 φ1mm～3mm小礫微量	普通	外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	
8-(遺構外)-1						内面	口縁部ヘラミガキ、胴部ヘラナデ、赤彩			内面	橙（7.5YR6/6）	
28-2	遺構外	土師器 壺	口縁部	– (4.3) –	20.0	外面	口唇部RL縄文 口縁部横ナデか	φ1mm以下砂微量	普通	外面	浅黄橙（10YR8/4）	内面風化
8-(遺構外)-2						内面	LR縄文をZ字状結節文1条で区画			内面	浅黄橙（10YR8/3）	
28-3	遺構外	土師器 壺	底部	– (1.7) (12.0)	30.2	外面	ヘラナデか	φ1mm～2mm小礫微量	普通	外面	明黄褐（10YR6/6）	
8-(遺構外)-3						内面	ヘラナデ			内面	明黄褐（10YR6/6）	
28-4	遺構外	須恵器 坏	胴部～底部	– (2.6) (5.0)	16.8	外面	ロクロ整形、底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り	φ1mm以下白色針状物質中量 φ2mm以下砂微量	普通	外面	黄灰（2.5Y5/1）	南比企産
8-(遺構外)-4						内面	ロクロ整形			内面	黄灰（2.5Y5/1）	
28-5	遺構外	土製品 形象埴輪	形象埴輪の一部か	– 1.5 –	25.0	外面	ナデか、赤彩	φ1mm砂微量	普通	外面	にぶい橙（7.5YR6/4）	
8-(遺構外)-5						内面	—			内面	—	

第 10 表　遺物出土点数・重量一覧

遺構	土師器		須恵器		石製品		陶磁器		その他			合計	
	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	点数	重量（g）	種別	点数	重量（g）
SX01	452	4619.2	2	45.3	2	23.0	0	0.0	0	0.0		456	4687.5
SX02	1	95.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		1	95.0
SD01	9	76.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		9	76.2
SD03	11	100.3	2	20.6	0	0.0	0	0.0	2	31.9	石	15	152.8
SD04	13	177.6	0	0.0	0	0.0	1	5.5	0	0.0		14	183.1
SD06	84	909.7	1	57.5	0	0.0	1	2.9	0	0.0		86	970.1
SK01	3	55.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0		3	55.6
SK03	14	176.9	1	9.6	0	0.0	0	0.0	0	0.0		15	186.5
Pit	0	0.0	1	0.7	0	0.0	0	0.0	0	0.0		1	0.7
遺構外	111	1631.3	17	241.9	2	46.6	4	21.3	3	26.7	形象埴輪、金属	137	1967.8
試掘	13	57.3	2	12.3	0	0.0	1	3.0	0	0.0		16	72.6
合計	711	7899.1	26	387.9	4	69.6	7	32.7	5	58.6		753	8447.9

第４章　まとめ

今回の前谷遺跡第 11 次調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝状遺構２基、溝状遺構６条、土坑４基、平安時代から中世相当の溝状遺構１条、時期不明のピット９基を検出した。以下に各時代の様相について述べる。

１　弥生時代後期後半から古墳時代前期の遺構と遺物

本次の調査では、２基の周溝状遺構を検出した。SX01 は、調査区中央に位置し北東側は調査区外に伸びるため全体の形状は不明であるが、開口部を挟んで北溝と南溝を検出した。平面形状は、南西側に開口部をもつ隅丸方形状とみられ、南溝に比べ北溝はやや不整形である。周溝内には、P02 ～ P09 及び SK03 を検出したものの規則的な配置は認められない。

遺物は、北溝先端部分の遺構覆土上層から中層にかけて多く出土し、他の地点は少ない。特に最下層の黒色粘土層からは甕形土器が出土した以外は、遺物はほとんどみられなかった。多くが甕形土器であり、完形のものはないが一部は口縁から胴部まで復元することができた。

北溝コーナー部分は、黒色粘土層が堆積した後、黄褐色土を主体とする層が斜めに堆積されているため、人為的に溝を整備した可能性が高い。下層からの遺物が少ない状況を併せて考えると、SX01 の溝が３分の１ほど埋没した後、溝の一部を整備する形で再利用したとみられる。また、遺構が完全に廃絶した後に北溝先端部分を中心に土器の廃棄が行われ、この内略完形の甕形土器などは、廃絶儀礼に関連する可能性がある。このように、SX01 の利用形態として構築から廃絶まで以上のような流れを想定することが可能である。

SX02 は、部分的な検出であり、東側は SX01 と SD06 に切られている。全体の形状は不明であるが、SX01 と同軸とみられる。遺物は赤彩された壺の胴部が出土している。

SX01･02 の軸と開口部の位置は、前谷１次の第１号方形周溝墓、前谷 10 次の SD04 とほぼ同じで、他に前谷６次の SX03、前谷８次の SX01、前谷９次の SD04 とも共通する可能性がある。この内前谷９次の SD04 は略完形の土器が多数出土しているため方形周溝墓の可能性が高く、前谷１次の第１号方形周溝墓は福田聖氏により周溝持ち建物と指摘されている。今回検出した SX01・02 は、互いに切り合っている点や、同時期の溝状遺構にも切られていること、出土遺物は甕形土器が多い点などを考えると周溝持ち建物である可能性が高い。

溝状遺構は、６条検出した。SD01・04・05 の底面は西側に向かって傾斜しており、調査区内の地形も西側に傾斜しているため、用水路としての役割を持っていたとみられる。SD06 も軸は異なるが底面の中央部分が一段下がる構造になっているため、上記の遺構と同じ役割であったと思われる。溝状遺構からは遺物の出土が少なく、SD06 上層から平安時代の須恵器が出土しているため、この時期の遺構としては調査区で一番新しい。

周溝状遺構との関係については、SX01 は SD06、SX02 は SD05・06 と切り合い関係であり、いずれも溝が周溝状遺構を切っている。溝状遺構と周溝状遺構の位置を見ても、併存していたとは考えられないため、調査地の土地利用形態が周溝持ち建物などの生活の場から用水路を含めた生産の場へと変化していったと考えられる。

２　平安時代から中世までの遺構と遺物

本次の調査では溝状遺構１条を検出した。遺物は流れ込みのものが多く、時期の比定は出来ないが、切り合い関係から平安時代から中世にかけての遺構とみられる。前谷遺跡内では、幅が狭く浅い溝として、前谷９次の SD03 や前谷 10 次の SD01 などがある。いずれも区画溝としての機能が想定されている。

３　まとめ

以上のように前谷遺跡第 11 次調査では、弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝状遺構が２基と溝状遺構６条を検出し、調査地の利用形態の変遷について明らかにすることができた。なお、同遺跡は、市内の鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡と比較すると、竪穴建物が検出されない点が大きな特徴となっており、今回の発掘調査においても竪穴建物を確認することができなかった。

鍛冶谷・新田口遺跡では、集落の形成期は方形周溝墓と周溝状遺構で構成され、古墳時代以降になると竪穴建物が出現し、集落遺構の主体となっていく。前谷遺跡は、前谷１次の第１号方形周溝墓、前谷３次の周溝状遺構について調査報告書では古墳時代前期五領式期のものとしているが、頸部が鋭角な壺や器台型土器、小形丸底坩など古墳時代以降に出現する器種が確認されていないことから、鍛冶谷・新田口遺跡や南原遺跡で竪穴建物が出現する段階より前に集落が途絶してしまった可能性もある。

今後の発掘調査の継続の中で前谷遺跡を含めた低地集落の様相や、変遷について明らかにしていきたい。

参考文献

田辺晋
2013「東京低地と中川低地における最終氷期最盛期以降の古地理」『地學雑誌』122 巻６号

福田聖
2000『方形周溝墓の再発見』同成社
2014『低地遺跡からみた関東地方における古墳時代への変革』六一書房

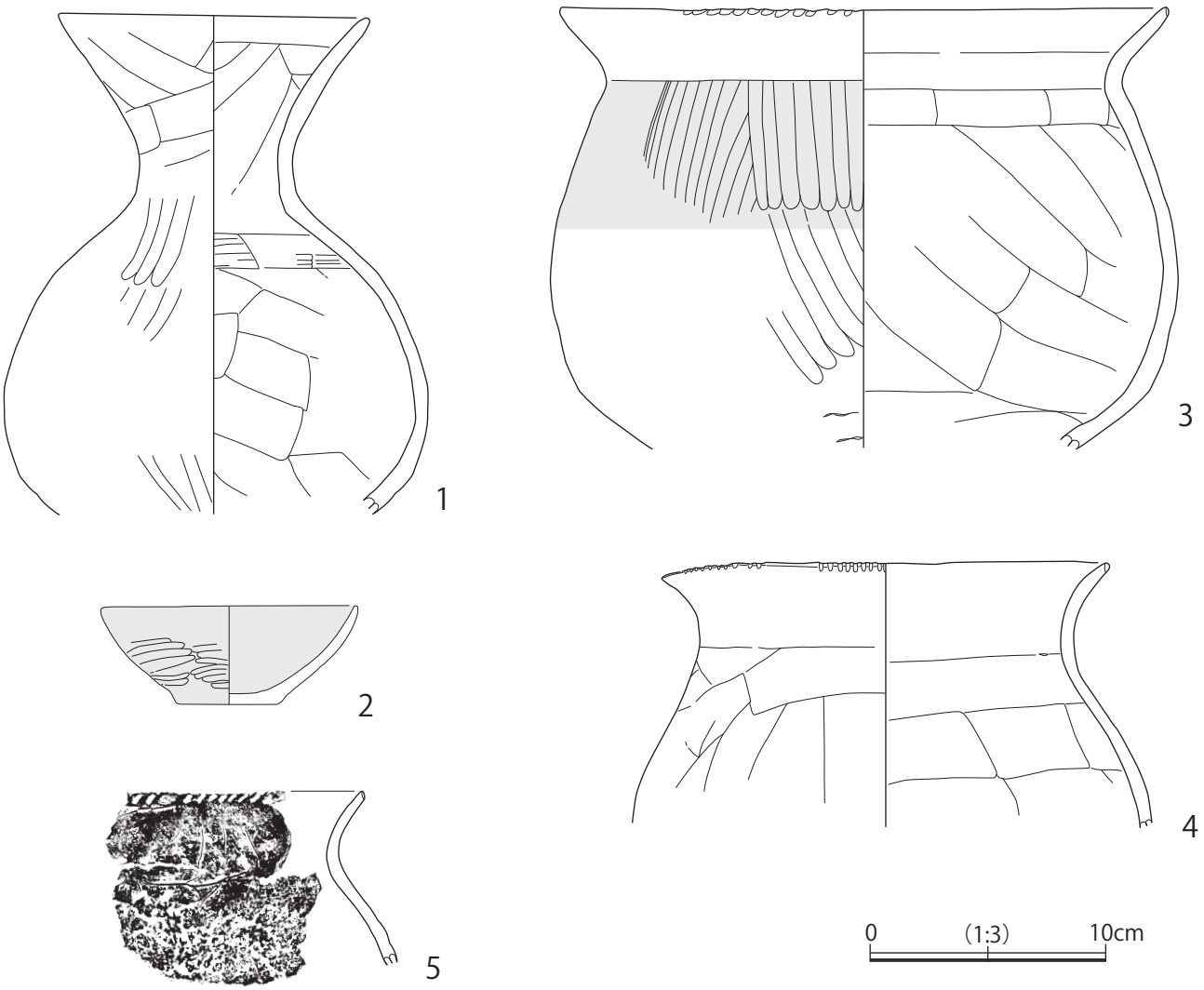
調査報告書
1978 『前谷遺跡発掘調査概要』 戸田市文化財調査報告ⅩⅢ　戸田市教育委員会
2012 『前谷遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 394 集
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
2020 『前谷遺跡Ⅷ』 戸田市文化財調査報告ＸＸＸ　戸田市教育委員会
2021 『前谷遺跡Ⅸ』 戸田市文化財調査報告 32　戸田市教育委員会
2021 『前谷遺跡Ⅹ』 戸田市文化財調査報告 33　戸田市教育委員会

前谷遺跡試掘調査出土遺物

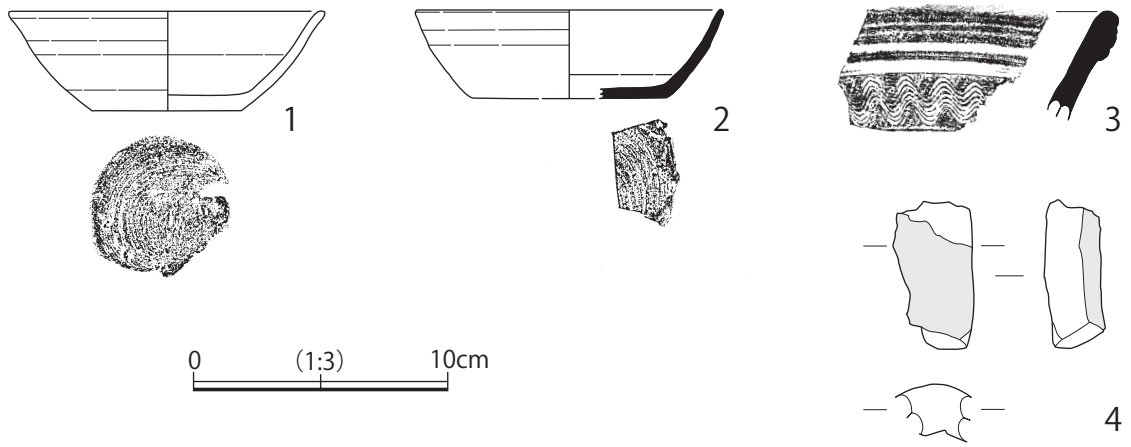
ここでは、前谷遺跡包蔵地内の試掘調査で出土した遺物について紹介する。図化した遺物は、上戸田２-25-2 他と上戸田２-27-8 のものである。

上戸田２-25-2 他は、前谷 11 次の南側に位置し、試掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期までの溝状遺構、土坑、ピットを検出した。今回図化した遺物が出土したのは、トレンチ壁際で検出した溝状遺構である。土器は遺構確認面より約 0.3m 上層の地点で検出し、土層の観察から溝状遺構の覆土中とみられる。遺物は複数の土器がまとまった状態で出土し、遺構から遊離したものを主に取り上げた。今回図化した遺物は５点で、鉢（２）は略完形、壺（１）と甕（３・４）は口縁部から胴部まで復元することができた。出土した遺物は甕が多いが、甕（３）は、外面をヘラミガキし一部を赤彩するなど一般的な甕とは異なる技法を用いるため、祭祀等の特殊な場で使用されたとみられる。遺物の出土状況などからも溝状遺構については、方形周溝墓であった可能性が高い。

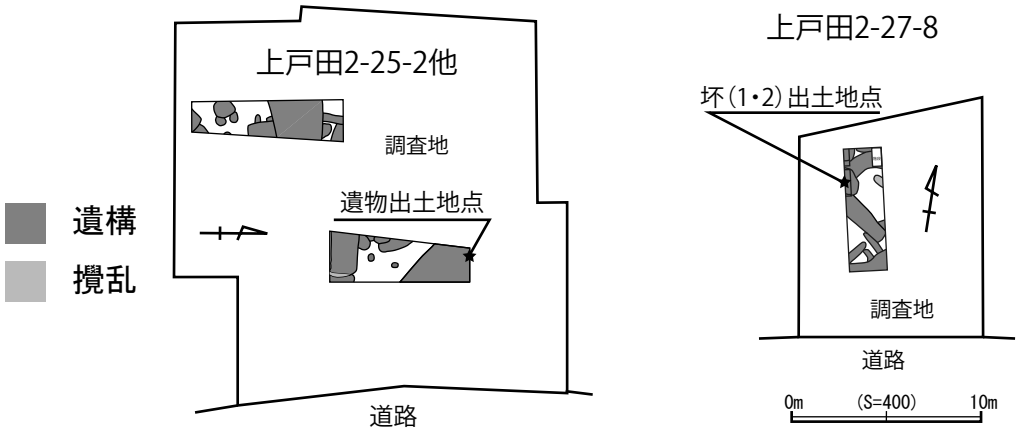
上戸田２-27-8 は、前谷８次･９次の西側に位置し、弥生時代後期から古墳時代前期までの溝状遺構、土坑、平安時代の土坑を検出した。今回図化した遺物は４点で、この内坏（１・２）は、平安時代の土坑から出土した。土坑からは焼土とともに、骨粉状の物質も出土したため、平安時代の火葬墓とみられる。



第 29 図　上戸田 2-25-2 他出土遺物実測図



第 30 図　上戸田 2-27-8 出土遺物実測図



第 31 図　上戸田 2-25-2 他、上戸田 2-27-8 平面実測図

第 11 表　上戸田 2-25-2 他、上戸田 2-27-8 試掘調査出土遺物観察表

挿図番号 / 図版番号	出土遺構	種別 器種	胴部	法量(cm) 口径 器高 底径	重量(g)	成形・技法の特徴		胎土	焼成	色調		備考
29-1	試掘(上戸田2-25-2他)	土師器 壺	口縁部～胴部	13.2 (21.2) –	389.1	外面	口縁部ナデ(横)、ヘラナデ(縦・横) 胴部ヘラナデ(縦)→ヘラミガキ	φ2mm以上小礫微量 φ1mm砂少量	良	外面	にぶい黄橙(10YR7/2)	
8-(試掘1)-1						内面	口縁部ナデ(横) 胴部ヘラナデ(縦)			内面	にぶい黄橙(10YR7/3)	
29-2	試掘(上戸田2-25-2他)	土師器 鉢	口縁部～底部	11.0 4.2 3.6	95.0	外面	ナデ(斜め)→ヘラミガキ(横)、赤彩	φ2mm以上小礫微量 φ2mm砂少量	良	外面	赤(10R5/6)	
8-(試掘1)-2						内面	ナデ(横)→ヘラナデ(縦)、赤彩			内面	赤(10YR6/4)	
29-3	試掘(上戸田2-25-2他)	土師器 甕	口縁部～胴部	(25.9) (18.8) –	298.0	外面	口唇部刻み目、口縁部横ナデ、胴部ヘラミガキ(縦)、赤彩	φ1mm砂中量	良	外面	にぶい橙(5YR6/4)	
8-(試掘1)-3						内面	口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ(横)			内面	にぶい橙(7.5YR6/4)	
29-4	試掘(上戸田2-25-2他)	土師器 甕	口縁部～胴部	19.1 (11.3) –	425.0	外面	口唇部刻み目、ナデ(斜め)	φ2mm以上小礫少量 φ1mm砂中量	良	外面	黄灰(10YR6/1)	
8-(試掘1)-4						内面	ナデ(横)			内面	にぶい橙(7.5YR7/3)	
29-5	試掘(上戸田2-25-2他)	土師器 甕	口縁部～胴部	– (7.4) –	60.2	外面	口唇部刻み目、口縁部横ナデ、胴部被熱	φ1mm以下白色粒子少量 φ1mm以下砂少量	良	外面	褐灰(10YR5/1)	外面被熱
8-(試掘1)-5						内面	口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ(横)			内面	褐灰(10YR4/1)	
30-1	試掘(上戸田2-27-8)	ロクロ土師器 坏	口縁部～底部	(12.5) 4.0 (6.0)	89.8	外面	ロクロ整形、底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り	φ1mm砂多量	普通	外面	橙(5YR6/6)	
9-(試掘2)-1						内面	ロクロ整形			内面	浅黄橙(7.5YR8/3)	
30-2	試掘(上戸田2-27-8)	須恵器 坏	口縁部～底部	(12.2) 3.5 (7.6)	40.0	外面	ロクロ整形、底部回転糸切り後周辺部回転ヘラ削り	φ1mm以下白色粒子微量 φ2mm以上小礫微量	良	外面	黄灰(10YR6/1)	
9-(試掘2)-2						内面	ロクロ整形			内面	黄灰(10YR6/1)	
30-3	試掘(上戸田2-27-8)	須恵器 甕	口縁部～胴部	– (4.0) –	53.4	外面	ロクロ整形、波状文	φ1mm砂少量	良	外面	黄灰(10YR6/1)	
9-(試掘2)-3						内面	ロクロ整形			内面	黄灰(10YR6/1)	
30-4	試掘(上戸田2-27-8)	瓦	–	– 2.2 –	42.1	外面	–	φ1mm以下白色粒子微量 φ3mm以下赤色粒子微量	良	外面	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	外面被熱
9-(試掘2)-4						内面	–			内面	褐灰(7.5YR5/1)	

写　真　図　版

図版 1

1　西側調査区　完堀（東から）

2　東側調査区　完堀（西から）

1　東側調査区　完堀　（北西から）

2　第１号周溝状遺構断面 A-A'　（南から）

3　第１号周溝状遺構断面 B-B'　（東から）

4　第１号周溝状遺構断面 D-D'　（西から）

5　第１号周溝状遺構北構完堀　（北東から）

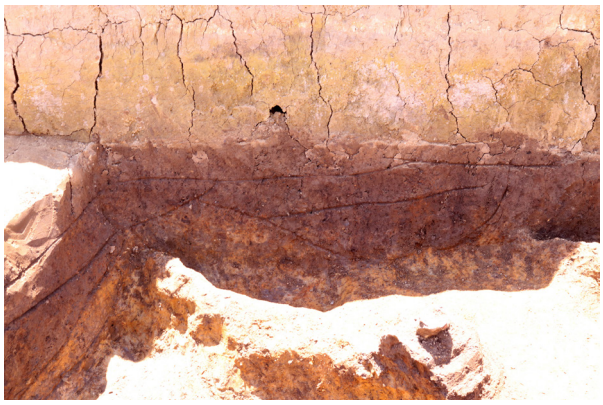
6　第１号周溝状遺構南溝完堀（西から）

7　第１号周溝状遺構南溝完堀　（西から）

8　第１号周溝状遺構　遺物出土状況（１）（南から）

図版 3

1　第１号周溝状遺構　遺物出土状況（２）（東から）



2　第２号周溝状遺構壁断面 A-A′（北から）

3　第１・２号周溝状遺構完堀　（東から）

4　第１号溝状遺構断面 A-A′（北東から）

5　第１号溝状遺構・第２号土坑断面（北東から）

6　第１号溝状遺構・第２号土坑完堀（北東から）

7　第２号溝状遺構完堀　（南　西から）

8　第３号溝状遺構断面 B-B′（西から）

1　第３号溝状遺構完堀（１）（東から）

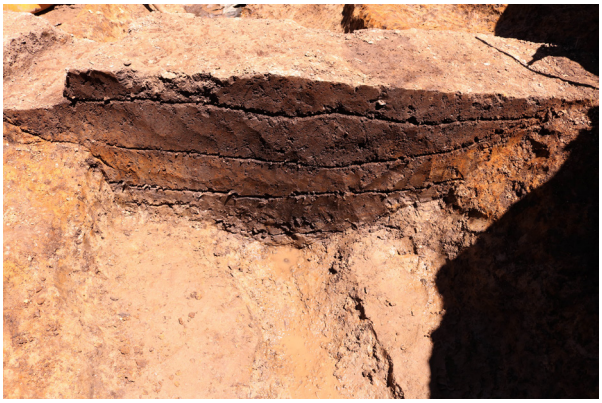
2　第３号溝状遺構完堀（２）（東から）

3　第４号溝状遺構断面 B-B′（北から）

4　第４号溝状遺構完堀（南東から）

5　第５号溝状遺構断面 B-B′（西から）

6　第５号溝状遺構完堀（南東から）



7　第６号溝状遺構断面 A-A′（西から）

8　第１号周溝状・第６号溝状遺構東壁断面（北西から）

1　第６号溝状遺構完堀（東から）

2　第７号溝状遺完堀　（北から）

3　第１号土坑断面 A-A′（北から）

4　第１号土坑完堀　（北から）

5　第３号土坑完堀　（南から）

6　第４号土坑完堀　（西から）

7　遺構外土師器壺出土状況　（南から）

8　基本土層（南から）

第１号周溝状遺構

12

13

14

第１号周溝状遺構

①

第２号周溝状遺構

1

第１号溝状遺構

①

②

第６号溝状遺構

1

第１号土坑

2

第３号土坑

1

2

3

第３号溝状遺構

遺構外出土

試掘上戸田２－２５－２他

図版 9 出土遺物④

1

2

3

4

試掘上戸田２－２７－８

報告書抄録

ふ り が な	まえやいせきじゅういち　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	前谷遺跡XI　埋蔵文化財発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	戸田市文化財調査報告
シリーズ番号	34
編 著 者 名	今井　源吾
編 集 機 関	戸田市教育委員会
所　在　地	〒335－8588　埼玉県戸田市上戸田 1-18－1　　TEL 048（441）1800
発 行 年 月 日	2022（令和4）年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
		市町村	遺跡番号					
まえやいせき 前谷遺跡 だいじゅういちじちょうさ 第11次調査	とだし　かみとだ 戸田市上戸田 2丁目25番1	11224	06－003	35° 48′ 48″	139° 40′ 49″	2021.7.12 ～ 2021.8.25	207.49	個人住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
前谷遺跡	集落跡	弥生時代 後期後半 ～ 古墳時代 前期	周溝状遺構　２基 溝状遺構　６条 土坑　４基	土師器	
		平安時代 ～中世	溝状遺構　１条	須恵器	
		その他	ピット　９基	形象埴輪 陶磁器 金属	

要　　約	本調査地点は、周知の埋蔵文化財包蔵地である前谷遺跡の包蔵地範囲に属し、JR埼京線戸田駅から南東に約600mの戸田市上戸田2丁目25番1に所在する。 前谷遺跡は、利根川・入間川・荒川によって形成された平坦な沖積地（荒川低地）に氾濫や流路変更によって左岸に発達した微高地上に立地している。 調査の結果、弥生時代後期後半から古墳時代前期では周溝状遺構２基、溝状遺構６条と土坑４基を検出した。平安時代から中世では溝状遺構１条を検出した。その他時期不明のピットを９基検出した。出土遺物は弥生時代後期から古墳時代前期の土師器、古墳時代の形象埴輪、平安時代の須恵器、近世の陶磁器を検出した。 今回の発掘調査によって、調査区周辺は弥生時代後期後半から古墳時代前期の周溝状遺構が形成された区域にあたることが判明した。

戸田市文化財調査報告　34

前　谷　遺　跡　XI

埋蔵文化財発掘調査報告書

発行・編集　埼玉県戸田市教育委員会
〒335－8588　埼玉県戸田市上戸田１－１８－１
印　　刷　関東図書株式会社
〒336－0021　埼玉県さいたま市南区別所３－１－１０
発　行　日　令和４年３月３１日